教育研究業績書

2024年05月20日

所属： 生活造形学科　　資格： 教授　　氏名： 黒田　智子

研究分野	研究内容のキーワード
近代建築論、近代都市論、デザイン方法論	有機的建築、有機的都市、遠藤新、丹下健三、フランク・ロイド・ライト、パトリック・ゲデス、生命感の表現、日本の伝統文化、創作論
学位	最終学歴
工学修士、工学士	神戸大学大学院 自然科学研究科 環境科学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.日本インテリア学会関西支部学生研究発表会に参加、ゼミ生が特別賞を受賞	2024年3月2日WEB開催2024年3月2日	日本インテリア学会関西支部学生研究発表会にゼミ生4名が参加し作8品を発表。そのうち、生活デザインコース4年山路真白さんの「観光客と地域住民を繋ぐコミュニティ型複合施設と土産品の提案」が地域活性化のために景観・敷地・建築・インテリア・プロダクトを総合的にデザイン提案して評価され、優秀賞を受賞した。
2.「鳴尾の水資源と暮らし」の連続5回講演の学生参加	2023年10月21日2024年1月16日	「現代建築論」履修生に、生活美学研究所甲子プロジェクト研究会主宰「鳴尾の水資源と暮らし」連続5回講演に、平均３回参加してもらい、建築の前提となる敷地にまつわる歴史・文化・SDGsの観点から、身近な環境の過去・現在・未来の水環境について共に考える。
3.JID主催学生シンポジウムに基礎造形実習受講の学生が参加し特異別章を受賞	2022年11月12日	JID（公益社団法人日本インテリアデザイナー協会）主催の学生シンポジウムにおいて、基礎造形実習第一課題「生命感の表現」の優秀作品を制作した4人の学生の発表の指導を非常勤・吉本光繪先生と共に行った。4人は、「特別賞」を受賞。
4.共通教育授業「インテリア空間のデザイン」の内容の工夫	2022年9月1日2023年1月31日	全学学生に開かれた共通教育の授業のために、これまでの建築・インテリアアに関わる教育・研究の蓄積の中から、インテリア空間の分野について、歴史的・具体的で今日的な課題が浮かび上がるように準備した。生活環境学科の施設・設備を活用し、双方向性の授業を行うために工夫。
5.基礎造形実習におけるゲストスピーカの招聘準備と省察	2022年6月11日2022年7月15日	基礎造形実習は、4クラス編成のため、予算が多くかかることから、令和4年度初めてゲストスピーカー（業界で活躍するインテリア・アーキテクトで、大学・短大・専門学校での非常勤をされ、海外のインテリア事情にもお詳しいJID国際委員会担当理事・酒井コウジ先生）に依頼、各クラスにおいて講評とワークショップを実施した。
6.共通教育科目「インテリアプロダクトのデザイン」の内容の工夫	2022年4月1日2023年3月31日	新たに担当することになった共通教育科目「インテリアプロダクトのデザイン」と「インテリア空間野でデザイン」について、各定員40名に対して、実体験ラボ内の近代の椅子の名作と、可動パネル・可動天井を用いて、実体験を重視した授業の内容・形式を工夫した。同時に、学生相互が意見交換するグループワークを実施した。
7.教育・研究誌『生活環境学研究』の卒論要旨指導	2022年4月1日2022年10月30日	3人の卒業生の掲載原稿の校正を指導した。
8.共通教育授業「インテリア・プロダクトのデザイン」	2022年4月1日2022年7月31日	全学学生に開かれた共通教育の授業のために、これまでの建築・インテリアアに関わる教育・研究の蓄積の中から、インテリア・プロダクトの分野について、歴史的・具体的で今日的な課題が浮かび上がるように準備した。生活環境学科の施設・設備を活用し、双方向性の授業を行うために工夫。
9.基礎造形実習のゲストスピーカー招聘と省察	2022年4月1日2022年7月31日	基礎造形実習は非常勤講師の協力を得て4クラスが同時に進行する。予算がかかるため、今年度初めてゲストスピーカーを招聘（6/13, 16, 7/15）させていただけ

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		た。事前準備、ゲストスピーカーのワークショップと講評、ゲストスピーカーの感想、非常勤講師の感想、学生へのアンケートなどのフィードバックを行った。
10.コーディネート・リフォーム実習	2020年9月1日2022年2月28日	短大1年生の実習授業である。実体験ラボの教材とスライドによる説明を連動させ、実習参加意識を高めた。これには、Classroomの活用が後押しとなった。コロナ禍、ほとんど大学に来ずに卒業した、というイメージを少しでも払拭したい意図もあった。
11.現代デザイン論	2020年9月1日2022年2月28日	短大1年生は、コロナ禍で2年とも多くがオンラインオンデマンドである。読み解く力、想像する力、書く力を伸ばしてもらうために、インタラクティブな形式の小レポートを実施した。40名弱に対応するために、教材のスライドにポイントが読み取れるように工夫した。
12.現代建築論	2020年9月1日2022年2月28日	大環3年後期にコース横断的に履修する授業である。想像力・思考力が、オンデマンド方式に依って失われないように、毎回の小レポートをインタラクティブに実施。生活美学研究所甲子プロジェクトにおけるコーディネーターの立場を活用し、講演会を企画、聴講によるレポート提出を実施した。ひとクラス110～120名と題人数ではあるが、2020,2021年度でそれぞれ、記述式の小レポートによる課題考案し、インタラクティブなチェックをおこなった。ポイントが読み解けるようなスライド（副教材）を工夫した。
13.近代建築論	2020年4月1日2021年7月31日	コロナ禍により2020年度は、オンラインとなった。学生にとってライブが良いと思ったが、2021年度よりオンデマンドとなった。対面の時の小レポートと同じペースでは、思考力・創造力が身につかないようない感じた。ひとクラス110～120名と題人数ではあるが、2020,2021年度でそれぞれ、記述式の小レポートによる課題考案し、インタラクティブなチェックをおこなった。ポイントが読み解けるようなスライド（副教材）を工夫した。
14.基礎造形実習（大環1年）の教育内容の見直し	2020年4月1日2021年7月31日	2020年度コロナ禍で遠隔となった本授業は、本来対面前提の教育効果をめざしたものだった。また、4クラス共通の授業の3クラスは非常勤が担当しており、分かりやすい指示をする必要があった。デザインプロセスの体験的理解を促進するために、これまでの授業内容を発展的に再考、Class ｒoomの活用によるインタラクティブな方法を考案・実施した。2021年度は、対面に戻ったが、ひとクラス30－40名に対して駒山な対応ができるように、Classroomの長所は引き継ぎ継続している。
15.旧甲子園ホテル周辺のまち歩き	2019年7月1日2019年9月30日	（公社）兵庫県建築士会の地域貢献活動助成を獲得、ゼミの学生たちと、非常勤教員を交え、旧甲子園開発地の生活道路のフィールド調査をおこなう。文化遺産、水路、橋、緑など、阪神電鉄による開発前の景観の跡を記録した。コロナ禍、まち歩きは、国道2号線以北にとどまったが、通学はしても大学周辺を知らない学生たちへの地域への関心を喚起した。2020年2月鳴尾ステーションキャンパスで成果発表を行った。
16.インテリア・建築設計（大環3A　後期)の成果の充実	2018年9月24日2019年1月21日	甲子園会館をホテルとして再生したと仮定し、西ホールをレストランとしてコンバージョンする課題を毎年おこなっている。受講生は、大きなスケールの空間に慣れていないが、西ホールを学生たちと毎年少しずつ実測してきたこと、先輩の作品実例が増えたことなどから、コンセプトに沿って、グラフィックから食器・家具・インテリアまで、単に家具を並べ内装を変えるのではなく、既存空間を読み解き、空間を構成するという本来の視点でインテリアを捉えられるようになっ

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		てきた。建築家・杉本雅子氏を講評会に招きコメントして頂き、取り組みへの達成感が強まり、空間デザインへの理解が深まった。
17.線状開発地甲子園の分譲渡時の地図の作成	2018年7月1日2018年9月30日	科研費の分担者として、線状開発地甲子園の分譲状況が分かるような地図をまち歩き用にゼミ生たちと作成する。西宮市郷土資料館における資料の閲覧・撮影、西宮市文化財保護課における大正期の地図・最新の地図の上に、Illustratorを用いてレイヤーとして暈ねた。
18.実体験ラボの家具・什器の整備と活用	2018年4月1日2019年3月31日	実体験ラボ（H3-B101）の教材整備事業（平成30年特別経費）として、３脚の椅子（サイドチェア（チャールズ・イームズ）、チューリップチェア（エーロ・サーリネン）、エロエス（フィリップ・スタルク））、２台のテーブル（リボリ、アジャスタブルテーブルE-1027（共にアイリーン・グレイ））を整備。学生たちの実物による検討の幅が広がり、モダンデザインに対する理解を一層深めることが可能になった。 基礎製図（短生1CD）および基礎設計・製図演習（大環1ABC）において椅子の実測と図面化の対象が広がった。また、建築設計基礎実習（大環1ABC）およびコーディネート・リフォーム実習（短生1CD）において、家具とインテリア空間とをトータルに構想する際、参照の実例が増えた。近代建築論（大環1ABC）および現代デザイン論（短生1CD）において、現代の椅子がモダンデザインの名作の理念と方法を参照している事実について、より理解しやすくなった。特に、アイリーン・グレイのテーブルは、グレイの専門家・川上比奈子氏をゲストスピーカーとして招き、実物を前にした講義を企画・実施できた。
19.実体験ラボの家具・什器の整備と活用	2018年4月1日2019年1月12日	実体験ラボ（H3-B101）の教材整備事業（平成30年特別経費）として、３脚の椅子（サイドチェア（チャールズ・イームズ）、チューリップチェア（エーロ・サーリネン）、エロエス（フィリップ・スタルク））、２台のテーブル（リボリ、アジャスタブルテーブルE-1027（共にアイリーン・グレイ））を整備。学生たちの実物による検討の幅が広がり、モダンデザインに対する理解を一層深めることが可能になった。 基礎製図（短生1CD）および基礎設計・製図演習（大環1ABC）において椅子の実測と図面化の対象が広がった。また、建築設計基礎実習（大環1ABC）およびコーディネート・リフォーム実習（短生1CD）において、家具とインテリア空間とをトータルに構想する際、参照の実例が増えた。近代建築論（大環1ABC）および現代デザイン論（短生1CD）において、現代の椅子がモダンデザインの名作の理念と方法を参照している事実について、より理解しやすくなった。特に、アイリーン・グレイのテーブルは、グレイの専門家・川上比奈子氏をゲストスピーカーとして招き、実物を前にした講義を企画・実施できた。
20.豊中市のふるさと納税返礼品の提案	2017年2月2017年11月	前年度に引き続き、共通のコンセプトに基づき、豊中市におけるふるさと納税に対する返礼品の企画・提案を、ゼミで取り組む。やはり複数の授産施設におけるそれぞれの得意な技術に着目、それらを出し合ってひとつの製品を作成するための企画・提案について、指導を行う。2か所の授産施設が得意とする技術を合わせ、小物入れ（革製品）の企画・デザイン・製品化をパッケージデザインも合わせて提案・実施した。
21.豊中市のふるさと納税返礼品の提案	2016年2月～2016年11月	豊中市におけるふるさと納税に対する返礼品の企画・

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		提案を、ゼミで取り組む。豊中市は、市内在住の市民の寄付が大部分なので、その気持ちを大切にした豊中らしさが現れるものを希望している。授産施設の製品を活用、将来的にはその自立に役立てたいとの希望もある。一方、授産施設の生産品と生産状況から、ひとつの施設のみでの返礼品作成は難しいと判断。複数の授産施設におけるそれぞれの得意な技術に着目、それらを出し合ってひとつの製品を作成するための企画・提案について、指導を行う。３か所の授産施設が得意とする技術を合わせたブックカバーの企画・デザイン・製品化をパッケージデザインを合わせて実施した。
22.ミース・ファン・デル・ローエについての講演会の企画・実施	2015年10月3日	生活美学研究所生活デザイン小研究会において、ミース・ファン・デル・ローエ研究の第一人者佐野潤一氏による講演を企画・実施。学生への還元として、担当の「近代建築論」（生活環境学科1年生）の2コマ分を提供。コース分け前の学生に親しみを持ってもらうために、事前に近代建築におけるミースを位置づけを説明する。また、実体験ラボ内のミースによる家具を素材として、インテリアに関する講義を行う。事後には、国外の建築家を対象に研究する場合、実際の作品の空間体験と原著にあたることとが重要であることを改めて説明。国際的に認められた研究者に直に接したことの素晴らしさを理解してもらう。
23.鹿児島県鹿屋市と北海道小清水町における農場の調査・見学およびそれを踏まえた卒業論文の指導	2015年9月3日～2015年9月8日	株式会社JFCとの産学連携において農業の6次化と都市生活の関係をテーマにしている。背景に国内食料自給の必要性と1次産業のみの生計の困難という日本における社会・経済的課題を問題意識に据える。JFCは、「地産都消」をキーワードに農業の6次化によって経営を展開する。都市の需要に応えた単価の高い作物を生産するために、外国人労働力を導入した大規模農業を各地で展開している。その生産現場を調査・見学する。また、各自治体でのヒアリング、現地図書館での文献調査を行う。2名のゼミ生が参加し、卒業研究としてまとめる。
24.芦屋山邑邸の見学会における引率と解説	2015年7月26日	意匠学会主催の山邑邸（1924）の見学会で学会の会員・学生(約30名）を引率。大会の会場が甲子園会館であったため、その対比を背景に解説。甲子園ホテル（1930）完成の6年前、遠藤新が南信（当時の所員）と共に共通の師・フランク・ロイド・ライトのスケッチをもとに完成させた。流動的な空間と装飾性の高さについての対比が可能と考え、見学者に興味を喚起するポイントとした。
25.生涯学習カレッジ　リバグレス猪名川町における講義	2015年6月27日、2015年7月11日	兵庫県猪名川町が主催する「生涯学習カレッジ　リバグレス猪名川町」の受講生22名に対して、甲子園ホテルの空間的特質を二回にわたって講義。装飾と空間の特徴を、公的空間（ホール・ロビー・外部など）と、私的空間（客室など）に分けて解説。遠藤新（設計者）と林愛作（支配人・取締役と兼務）の意図を織り込みながら紹介。好評により甲子園会館の見学希望が出たことから、翌年の2月に見学会を開催し、受講生らを案内。
26.講演会「侘茶の素因」の企画・実施	2015年5月2日	生活美学研究所定例研究会において、相川浩氏の講演「侘茶の素因」の企画・実施をおこなう。侘茶を完成させた千利休の師武野紹鴎の「侘」概念を藤原定家の和歌・「毎月抄」、「詠歌大概」に求める内容。学生たちへの還元のため、「現代建築論」（生活デザインコース4年、建築デザインコース3年）の授業を2コマあてる。ともすれば、難解とされがちな古典に親しみ、創作論という視点から定家にも親しんでもらうため

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		に、特に二点に力点を置く。第一は、「数寄」と「侘」をめぐる日本の伝統について事前講義、第二は、講演当日において視覚的理解を促すため、PPTを作成・編集。事後には、講演者が、ルネッサンスの建築家の建築論の第一人者であることを紹介し、学問を究めるための姿勢についても考えてもらう。
27.カット野菜の原料生産地についてのB to Bパンフレットの作成	2015年2月～2016年3月	株式会社JFCとの産学連携研究の一環。JFCの卸先（スーパーマーケット）に配布するためのパンフレットの作成。直接目的は、カット野菜の原料となる農作物の産地についての紹介である。教育上の目的は、自然の豊かさをはじめ、景観的特徴や歴史・文化が伝わるようなデザインをおこなうプロセスを実体験することにある。かなりの情報量を整理し、グラフィックとして、親しみやすく、分かりやすく、興味を喚起するものを目指す。対象とした二地域は、土質が類似し、農地の区画が大きいため灌漑設備が整備され、大規模農業が可能である。また、強風対策のため防風林を持つ。それらの共通点を視覚的な基盤として、そこに大自然・歴史・文化に関する情報を盛り込むよう指導。ゼミ生2名が参加し、卒業研究としてまとめる。HPのコンテンツとしての役割を併せ持ち、アップを準備中。
28.遠藤現氏の講演と芦屋山邑邸の見学会の企画と実施	2014年2月25日	生活美学研究所生活デザイン小研究会において、遠藤新の孫にあたる遠藤現氏（建築家）を招く。遠藤は、師・ライトを神とも仰ぎ尊敬していたことから、前半は、ライトの作品、後半は、遠藤の作品を紹介・解説してもらう。生美研は、学生の教育との接点が少ないため、少しでも学生に教育効果がもたらされるようにとの生美研の方針を受け、遠藤現氏を講師として、見学会を企画・実施。生活環境学科3年生が7名参加。
29.生活学会での口頭発表の指導	2013年1月13日	ゼミ活動・学科活動の成果をゼミ生がポスターにまとめ、口頭発表することを指導 １．生活環境学科4年　加藤絵里、津波啓発サイン計画 ２．生活環境学科4年　郡山菜摘、スーパーマーケットにおけるカット野菜のパッケージ
30.津波啓発サイン計画	2012年10月2014年1月	西宮市防災危機管理局 防災総括室 災害対策課からの依頼（ボランティア）で、学生有志（着手当時、4年生1名、2年生6名、3年生6名）とともに取り組む。目的は、南海トラフ地震発生後の津波に備えて、市民が日頃から意識を向けるため、人通りの多いところに設置する立体サインである。津波襲来後に警鐘・鎮魂の意味で設置するのではないこと、通常の平面によるサインではないことから先例がない難しさがあった。そこで、従来型のワークショップだけで市側の期待する結果を得ることは難しいと判断。原寸大の立体模型を作製し、距離に応じての見え方の違いを実験的に検討したり、設置場所の特徴に対応した内容を考案したりするなど、グラフィックやプロダクトの分野に限るのではなく、生活環境学科の学生が備える能力（生活者の視線の重視・空間的な把握）をできるだけ引き出してもらうように工夫。また、夢や理想を実現することの難しさを、学生と共に乗り越えるように心がけた。 2014.3.24津波啓発CUBE完成披露会にて新聞社（毎日、産経、神戸）のインタビューを受ける。
31.カット野菜の生産についてのHPの作成	2012年2月～2013年3月	日常に購入する食品として、カット野菜は普及の途上にある。しかし、消費者には、安全安心に関する信頼が確立しているとはいえない。それを達成するために、工場・農場の現場見学に基づいて、HPのコンテンツを提案。農業の6次化を視点とするため、工場(2次産業)と家庭での野菜の洗浄・鮮度の比較、農家(1次産

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		業)での土壌のこだわりなどを中心とした。HPのソフトを最初から使用すると、それによってイメージが制限され固定化する危険がある。そこで、別の表現媒体として仕掛け絵本をモデルとした。また、親しみやすさとして、手書きイラストの採用、カット野菜を使ったレシピの紹介など、参加学生のそれぞれの個性が生きるように構成を含め指導した。2名のゼミ生が参加し、卒業研究としてまとめる。
32.カートンのデザイン	2011年4月2012年3月	神戸物産から業務スーパーの商品パッケージとして、ジャガイモ5kgのカートンデザインを依頼される。提案したものが実現する社会貢献の歓びがあるので、研究室のゼミ生と共に取り組むことにした。各学生のアイデアを、常に全員が共有できるように、計画期間は、学生の持ち回りで「ポテト便り」を編集・配信。値段と量のみをアピールする業務スーパーの寒々しいインテリアに対して、箱が積み重なったときに大地の温もりが伝わるようなデザインを目指すように指導した。好評のため、ジャガイモ10ｋｇ、ナガイモ5kg、ゴボウ5kgのカートンを手掛けた。不作のゴボウ以外は、すべて実際の商品パッケージとして実現した。5名のゼミ生が参加し、1名が卒業研究としてまとめる。
33.シールつき透明付箋の提案	2009年11月2012年3月	大阪府シール組合の依頼で、環境を大切に、とのメッセージ性があり、楽しく使用できるシールつき透明付箋のデザインをおこなった。頁の端に付箋の森が成長する、というアイデアを、シールのもつ特性と結びつけ、パッケージから付箋、シールまでが、ストーリ性を持つことができるように指導。8名の参加学生のうち、1名が製品としての完成までに携わる。
34.防災シールのデザイン	2009年3月2010年7月	大阪府シール組合からの依頼で、ゼミ生と防災のためのシールをデザインした。とっさの事故の際、普段なら冷静に伝えることができる情報（自分のいる場所や、目印になる建物）を伝えることができないことに着目。とっさのときに、読み上げることができ、電話の横に貼り付けるシールを提案。普段は親しめるデザインとなるように、工夫している。学生、シール組合員と共に、大阪府、西宮市に贈呈。
35.西宮市環境センターのインテリアの提案	2008年4月2010年3月	西宮市環境センターの依頼にこたえ、学生たち（初年度2年生）と共にボランティアで取り組む。エントランス、庭、歩道に看板を、内部階段の蹴上部分に絵を提案。環境センターは、シギ・チドリが飛来する市の自然環境を、小・中学生が体験的に学習することを目指す施設である。子供たちが、親しみと興味をもてるようなデザインとした。また、距離や場所によって、絵やサインも見え方が異なることに注目し、楽しい仕掛けになるように指導した。生活環境の学生の能力を引き出しながら、社会貢献としても役に立つように配慮している。
36.インテリアデザイン・リノベーションを盛り込んだ設計実習科目の提案	2007年4月～2008年2月	生活環境学科の建築デザインコースと生活デザインコースの設計実習は、建築学科と区別がつきにくい、学生たちは、生活造形のインテリアコースにおける課題作品に憧れる傾向がある、などの現実を踏まえ、設計実習関連科目の内容を検討。平成22年度入学生から、建築だけでなく、インテリア、家具、グラフィックなど、トータルな空間デザインを行う科目を、生活行為を基点に提案。同時に、伝統建築、様式建築、近代の良質な建築の素晴らしさを理解する機会とするために、既存の名建築のリノベーションとしての課題を提案、シラバスに反映。これらの科目は、2013年度から実施されている。
2 作成した教科書、教材		

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
1.コーディネートリフォーム実習（短大生活造形1年後期）の課題及び配布資料	2022年12月18日	サスティナブルなインテリアアーキテクトという観点から、フランク・ロいい土・ライトの落水荘、チャールズ＆レイ・イームズの自邸について、その時代背景・コンセプト・特徴についてのスライド、CAD（Vector Works, Architect Designer)による平面・立面・断面図のデータ構築を行った。
2.実体験ラボの教材（食器）のナンバリング	2020年3月	実体験ラボには、日本およびヨーロッパの著名ブランド・産地の食器がある。大学・短大の教育効果を考えて活用する計画だったが、6コース制となり、活用する授業が減少、他の授業でも合理的に貸借できるようにナンバリングを行った。司馬麻実助手（当時）の協力による。
3.『作家たちのモダニズム　建築・インテリアとその背景』改訂	2020年2月	本書は、2003年に発刊、2013年に改定している。その後、フランク・ロイド・ライトについて新たな知見を得たので、ｐ．36を全面的に改訂した。
4.能楽部自演会パンフレットへの寄稿	2018年2月24日	能楽部の顧問として、自演会のパンフレットに「猩々」を寄稿。 1人でも多くの学生に日本の伝統文化である能楽に興味を持ってもらいたいという動機から、謡曲「猩々」について考察している。
5.実体験ラボの家具・什器の整備（平成28年度　特別経費）9	2017年4月	実体験ラボ内の什器類の整理・整頓のための収納家具を設置。基礎造形実習、生活デザイン演習IIなどの教材をより活用しやすくした。
6.実体験ラボの家具・什器の整備（平成28年度　特別経費）	2016年4月	実体験ラボの家具・什器は、平成6年度、平成17、18年度に特別経費により提案・整備した。関連授業において、当初の目的を概ね満たしてきた。平成24度入学の大環生活デザインコース学生のために、生活文化演習II、生活デザイン演習I～IVなど、家具・プロダクト製品に重点を置いた科目が新設された。すでに、建築デザインコースでは、平成20年度入学生から建築とインテリア空間を総合的に学ぶことに重点を置いた建築・インテリア実習I・IIなどの充実が求められ、教育方法において工夫を重ねている。同様の趣旨で、生活デザインコースでは、住宅・インテリア設計、建築・インテリア設計が設けられている。 　それらの新たな教育目的に対して、効果的な教育成果を得るための、家具・什器の整備。（進行中）
7.自由学園明日館の椅子の実測とCAD化	2016年3月	自由学園明日館のテーブル（遠藤新、1923）を実測しCAD化する。ゼミ生1名が協力。インテリア系の演習・実習での活用を目的とする。
8.甲子園会館のロビーと西ホールの実測とCADによる図面化	2016年2月	甲子園会館のロビーおよび西ホールを実測し、平面図、展開図、断面図をCADにより作成。インテリア・建築系の実習・演習での活用を目的とする。京都工芸繊維大学 造形工学研究科 教員2名、大学院生5名、4年生1名、武庫川女子大学 4年生1名、3年生3名が参加。 （平成27年度学内奨励金による）
9.自由学園明日館の椅子の実測とCAD化	2015年3月	自由学園明日館の椅子（遠藤新、1923）を実測しCAD化する。ゼミ生3名が協力。インテリア系の演習・実習での活用を目的とする。、
10.建築・インテリア設計における教材と課題の作成	2013年9月	生活デザインコースでは、トータルな空間デザインをを重視した課題を開始。名建築・甲子園ホテルに触れる機会が少ない生活環境学科の学生たちが、少しでも機会を増やし、空間的にも深く理解してもらえるように、実測しやすい図面教材と、リノベーションのための課題を作成。見学による空間体験をもとに、インテリア空間・家具デザイン・グラフィックデザインを提案するための基盤を提示する。
11.近代日本の作家たち―建築をめぐる空間表現	2006年1月30日	近代日本の建築、インテリア・生活空間、庭、彫刻など、建築をめぐる空間表現を学ぶための教科書の企画・編集。「作家たちのモダニズム」の姉妹編とし

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
		て、同様の分かりやすさ、親しみやすさを心がけ、読者の興味を喚起するように工夫している。
12.作家たちのモダニズム一建築・インテリアとその背景	2003年2月10日	近代建築史、デザイン史を学ぶための教科書の企画・編集。近代において、建築・インテリアのデザインをおこなった作家を14人選択し、彼らの生きた時代背景、人生、デザインの理念・方法、代表作品を紹介。自分だったら、どう生きるか、自分だったらどう創るか、考えることができるように編集。ともすれば、難解に感じられる欧米の近代を身近に理解できるように工夫した。
13.CAD/CGシステム	1995年	スタディ・プレゼンテーションの両方に適した教育用の建築系ソフトとして、Form ZおよびMini Cadを、設計・製図用ソフトとして選択。実体験ラボの空間・椅子と連動させ、ヒューマンスケールから発想した空間を描画し検討する。
14.実体験ラボ”の計画と設計	1993年	インテリアデザインの教育システムについての提案と実施　Development of Education Systew for Iuterior Desigh.　Planning and Desigu for“Real Experieuce Laboratory” 1. スケール感の育成のための可動天井と可動間仕切りを設置 2. デザインコンセプトについての感覚育成の足がかりとしてのモダンデザインの椅子の中から、建築家がデザインしたものを選択・設置
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.一級建築士	1991年	国家資格（国土交通大臣）
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1.生活美学研究所甲子プロジェクト研究会における「鳴尾の水資源と暮らし」連続回講演の実施	2023年10月21日於南館2024年1月16日	水は水道栓をひねれば出てくるのが当たり前、という生活をしているが、大学がある鳴尾の地において、400年前は違っていた。近代における水系の変化、地下水の活用から、現代における水源、未来の大阪湾と瀬戸内海の在り方まで、連続5回講演を計画実施した。 第１回「鳴尾北郷義民とその時代」 2023年10月21日（土）14:00開始　南館S-45 田中 秀哉 氏（鳴尾北郷義民追悼会代表） 第2回「枝川廃川の経緯と甲子園筋の誕生」 2023年10月28日（土）14:00開始　南館S-45 西尾 嘉美 氏（元西宮市立郷土資料館学芸員） 第3回「地下水保全　～ 宮水（灘五郷）地域の事例紹介～」 2023年11月11日（土）14:00開始　南館S-45 済川 健氏（スミカワ研究所有限会社　代表取締役） 第4回「鳴尾地域の水道とその歴史」 2023年12月2日（土）14:00開始　南館S-45 舩本 和弘 氏（西宮市上下水道局水道施設部長） 大垣 裕亮 氏（西宮市上下水道局水道施設部浄水課水

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		質試験チーム主査） 第5回「これからの瀬戸内海への提言、港（海）とまちの融合を考える」 2024年1月16日（火）10:00開始　南館S-57 信時 正人 氏（ヨコハマSDGsデザインセンターセンター長、（株）エックス都市研究所理事）
2.第13回甲子プロジェクト研究会コーディネーター	2022年12月17日	甲子園ホテルの設計者・遠藤新は、学生時代から内側から外側へ(from within to outward)を設計理念の基盤に据えて設計活動に貫いたと考えられる。その後、帝国ホテル設計のためにチーフ・アシスタントをつとめ、師・フランク・ロイド・ライトを支えた。遠藤の建築論を明らかにするうえで、その影響は多大と考えられている。 今回は、遠藤が師と仰いだライトの言説と作品を専門とされる水上優教授（兵庫県立大学）に講演を依頼し、その言説・建築作品の特徴について講演頂いた。
3.生活美学研究所研究員として生活美学研究所紀要の2022年度査読論文の担当	2022年9月2022年11月	生活美学研究所では、従来の美学とは異なる「生活美学」を、夛田道太郎初代所長の頃より追求してきた。生活美学の根幹になる理念・方法を求めての投稿論文は、新しい視点と実践的観点から新たな分野を開拓するものである。具体的には、都市計画・地域計画を対象としつつ地域のコスモロジー（聖と俗など）に視点の根幹が置かれるため、査読者の選定と真正な趣旨の理解が得られるように説明した。
4.国際化委員	2019年4月1日2022年3月31日	年に数回の会議に出席、海外留学生の推薦等、学科に周知する。
5.FD推進委員　副委員長	2019年4月1日2022年3月31日	2019年度は、委員長をサポート、2020年度、2021年度は、情報交換の企画グループのまとめ役および、委員会の司会をつとめる。
6.生活美学研究所研究所員	2018年4月1日2021年3月31日	甲子プロジェクトのおいて、西尾嘉美氏（西宮市郷土資料館）山口静一氏（埼玉大学名誉教授）による講演会を企画・実施。西尾氏には、郷土史の観点から「水の流れがもたらすもの一武庫武庫の川と茅渟の海」、山口氏には、フェノロサと林愛作との関係について「フェノロサをめぐる一林愛作と柳田暹暎」と題しての講演を企画・実施。 生活デザイン研究会において、建築家・西濱浩次氏（（株）コンパス設計工房主宰）にリノベーションの立場から「造る時代から遺す時代に一魅力の再生リフォームー」と題して講演を企画・実施。 甲子プロジェクトの経過は、生活美学研究所紀要第31号（リポジトリ）に掲載予定。
7.幹事教授	2018年4月1日2019年3月31日	教務、入試広報業務などについての学科長の補佐。新6コース制を高校生と父兄に分かりやすく説明するため、どの学科教員も活用しうるヴィジュアルデータを作成。新6コース制のメリット・デメリットを客観視し教育効果を得るため、特に、英語教育に関して教育経験重視を提言。大学院について、履修便覧、科目担当に関する教務をおこなう。
8.教育・研究誌『生活環境学研究第6号』編集事務局代表	2018年4月1日2019年3月31日	教育・研究誌『生活環境学研究第6号』の編集作業。特に、審査論文のため、投稿者と審査者との間のやり取りが公正かつ円滑に行われるように工夫。発行先を再検討し、卒業研究展と同様、教育・研究機関だけでなく、学生の就職先の候補となる企業に送付。
9.教育・研究誌『生活環境学研究第5号』編集事務局代	2017年4月2018年3月	教育・研究誌『生活環境学研究第5号』の編集作業。論

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
表		文、論説報告のカテゴリー・ルールを、編集事務局代表の立場から再考・改変。特に、審査論文のため、投稿者と審査者との間のやり取りが公正かつ円滑に行われるように工夫。
10.学科パンフレットのビジュアル面の提案	2017年4月2018年3月	2019年度から生活環境学科が6コース制となることをから、現3コース制でも工夫を要するビジュアルデザインについて、変更のポイントを提案。
11.生活美学研究所研究所員	2017年4月2018年3月	甲子プロジェクトのおいて、西尾嘉美氏（西宮市郷土資料館）林裕美子氏（林愛作の孫）による講演会を企画・実施。その成果を報告書第１号として編集。 生活デザイン研究会において、川上比奈子氏（摂南大学）による「アイリーン・グレイの家具・インテリア・建築デザインの謎」を企画・実施。
12.幹事教授	2017年4月2018年3月	教務、入試広報業務などについての学科長の補佐。 まちづくりコースの新設のために、地域性、リノベーション、分析と提案を組み合わせた実習・演習など、近未来に必要と考えられる教育のコンセプトをたて、学科教員の意見を調和ある形式で集約し構築、新たなカリキュラム・授業内容を提案する。結果として、6コース編成を議論する始点の役割を果たす。
13.幹事教授	2016年4月1日2017年	教務、入試広報業務などについての学科長の補佐。 オープンキャンパスにおける見学者に対して、ヴィジュアルで分かりやすい学科説明スライドを作成した。
14.学科における過去10年間の教職履修卒業生連絡メールシステムを作成	2015年4月2016年3月	生活環境学科と生活造形学科は、家庭科の免許の取得が可能であるが、毎年教職履修者は、10名前後である。一方、非常勤の募集は、非常に多いことが分かった。そこで、教職課程を履修した過去10年間の卒業生に、教職支援室（現・学校教育センター）の情報をメールで知らせるための仕組みをつくる。（教職支援委員（2013.4－2016.3）をつとめる間の作業。105名にアンケートしたが、情報希望者は5名のみ。）
15.生活美学研究所研究所員	2014年4月1日～	生活およびデザインの視点から研究会の充実、学生への還元など目標とする。
16.2014年度卒業研究の提出・展覧会・発表会の方法	2014年2月～2014年4月	卒業研究成果の展覧会と発表会を、学生が主体的に取り組めるように、関係教員と共に従来の学科展との併合と開催時期とを検討。また、主査・副査による、きめ細かな評価によって、学生の能力を伸ばし、充実感が得られる手順と方法を提案。実施については現在進行中。
17.2014年度卒業研究のための研究室配属の方法の提案と実施	2013年5月～2013年10月	卒業研究のための研究室配属は、従来、丹嶺宿泊研修で学生たちが決めていた。4年間の集大成に取り組むための方法としては、改善の必要があると考え、学生たちが自ら選んだテーマと方法にふさわしい研究室を選択しやすい方法を3年生担任を中心に検討・実施。
18.教職支援委員	2013年4月1日～2016年3月31日	家庭科教員免許に関わる業務
19.教育・研究誌『生活環境学研究 』編集事務局代表をつとめる	2013年4月～	学術性とデザイン性を備えた雑誌を学科から発行するための編集事務の代表をつとめる。学科教員・助手の専門分野が多岐にわたること、業務で多忙であることなどを考慮し、各位の協力を仰ぎ、第1号から各号を年内に発刊。
20.教育・研究誌「生活環境学研究」創刊号の編集	2012年7月2013年9月1日	2012年7月2013年9月1日 生活環境学科における教育・研究両面の学術的な活動が一望にできるような雑誌を創刊するにあたり、ワーキンググループのまとめ役（編集事務局長）をつとめる。構成、内容、スケジュールなどのたたき台と、読者の興味・関心を喚起するための頁レイアウト、表紙のデザインの方向性を提示した。審査論文を掲載するにあたり、文系・理系の審査方法の違いを考慮しながら、若い人を育てる趣

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		旨でたたき台を提示。分担者ができるだけ仕事がしやすいように、また、会議・打ち合わせの回数を最小限におさえる配慮を心がける。図書館リポジトリにて、論文ページのみデータを公開。 （2014.1.30　ISSNとISSN-Lを国会図書館より取得）
21.共通教育委員	2010年4月1日2013年3月31日	学科が提供する共通教育科目に関する業務。また、全共通教育科目を対象に、学生たちにわかりやすくアピールするための冊子M's Collectionにかかわる。学生の学生による学生のための冊子として、編集作業に携わる学生たちにアドヴァイスをおこなう。デザインに関わらない学科の学生の割合が多く、コミュニケーションについては、教職員の方との協調・共同を心がける。
22.教務委員	2007年4月1日2010年3月31日	学科の教務に関する業務。2009年度は3名、2010年度は2名、新任教員を迎えるにあたり、生活環境学科、生活造形学科の担当科目を関係教員と検討。また、大環建築デザインコース、生活デザインコースのカリキュラムのスリム化と履修モデルについて検討。建築士受験資格内容の大幅変更に伴い、履修要綱の建築士受験資格取得科目を見直す。履修要綱の関連ページについて、学生にとって読み取りやすいものに書き換える。
23.教育・研究誌『生活環境学第10号』の編集		編集事務局長として最後の紙ベースの学科情報誌を、編集事務局委員の協力のもと編集した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.専門分野から見た教育・研究課題としての「共生」	単	2021年12月15日	住まいの絵本館2020報告書『家族の絆から共生の時代へ』p.36-42	住まいの絵本館による講演会と絵本ワークショップとを組み合わせた企画を生活美学研究所定例研究会とワークショップを組み合わせた形で行った。このことをきっかけに、スイス連邦工科大学での日本人の立場と「多文化共生」体験、専門分野である建築論における「共生」の視点、絵本ワークショップの方法の長所などについて省察し、次世代に向けた考察をおこなった。
2.『作家たちのモダニズム　建築・インテリアとその背景』改訂	共	2020年2月		本書は、2003年に発刊、2013年に改定している。その後、フランク・ロイド・ライトについて新たな知見を得たので、ｐ．36を全面的に改訂した。
3.「くるめがすりの家」によせて―住み手と住宅と建築家と―	単	2011年10月23日非売品	小塩完次記念(財)日本禁酒同盟　資料館　発行、写真と日記で綴る小塩完次・とよ子の禁酒運動　世界連邦運動の歩み、p.63-66	遠藤新(1889-1951)設計のくるめがすりの家（1931）について紹介している。禁酒運動に生涯をささげた小塩完次・とよ子夫妻の住宅は、夫妻が住む以外に、集会、若い親族の下宿などに使用された。遠藤が、「くるめがすり」と名づけた理由を、カーライルの衣裳論を背景に当時の生活文化に着目しながら、生活と空間の相互関係を考察している。また、遠藤が大切にした建築の「佇まい」をもたらす、敷地と建築の関係、建築空間の特徴などを解説している。
4.遠藤新の建築論における「用」	単	2011年10月	横川公子編・著『生活をデザインする』第6章第2節　収録	遠藤新の「建築論」（1926）に記述された生活と空間の関係を紹介。フランク・ロイド・ライトの弟子が、芸術としての建築に至るために、生活の「用」から設計を考えていること、「用」は平均的に満たすのではなく、重点の度合いを判断すべきだとしていることなどについて解説している。
5.至上をめざす建築の行者　遠藤新	単	2010年6月1日	白い国の詩、東北電力株式会社、p.5~9	遠藤新(1889-1851)と師フランク・ロイド・ライト(1867-1959)との出会いは、真に偉大であろうとする遠藤自身の意志に導かれたものである。それを基盤に遠藤は、自然に即し人の生活を尊重する自らの建築理念を培い、名作・甲子園ホテル（1930）を実現した。彼の理念は、日本と異質の建築条件である大陸の仕事へと展開した。帰国後は、政権と経済の論理に屈せず、学校建築の多くを東北地方で実現した。
6.近代日本の作家たち	共	2006年1月	学芸出版社。	近代日本における建築をめぐる空間表現の前提、ヨーロッパのモダ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
建築をめぐる空間表現		30日	pp.12-16,18,19,70,71,74-84,109-123,162,163-176	ニズムと「日本的なもの」論、アメリカに移動する前衛芸術家と日本のモダニズムなどを概観する。建築家については、伝統性の近代的解釈、欧米建築家の作法の受容と昇華を視点に。インテリアデザイナー・住宅作家については、近代生活の場のためのデザインを視点に、作庭家・彫刻家については、芸術の空間性を視点に解説している。
7.Metabolismus, Anthologie zum Städtebau: Vom Wiederaufbau nach dem Zweiten Weltkrieg bis zur zeitgenössischen Stadt Band III	共	2005年	Gebr.Mann Verlag /Berlin, Vorwort :Vittorio Magnago Lampugnani pp.219-221	スイス連邦工科大学建築理論研究所のプロジェクト”Anthologie zum Städtebau: Vom Wiederaufbau nach dem Zweiten Weltkrieg bis zur zeitgenössischen Stadt”に参加、20世紀の都市論として唯一日本発として国際的に注目されたメタボリズムについて、時代背景、オリジナルメンバー（菊竹清則・大高正人・川添登・磯崎新）の都市設計案と彼らの師・丹下健三の「東京計画1960」について各特徴と関係を解説。
8.作家たちのモダニズム―建築・インテリアとその背景	共	2002年02月	学芸出版社,PP.218,19,70,71,73-84,109-120122,123,162,163,165-176-16, PP.25-40	黒田智子・小林正子・木村博昭・谷本尚子・川上比奈子・本多昌昭・田所辰之助・廻はるよ・奥佳弥・矢代真己・川島洋一・梅宮弘光・南智子 近代を代表する14人の建築家をとりあげ、時代背景、生涯、理念方法、代表作品に分けて解説。読者が自分とひき比べて、作家としてどう生きるか、作品をどう創るかを考察できるように構成。それによって、現代建築デザインの基盤になっていながら生きた理解が難しい近代建築史・論を等身大から把握することを目指す。建築からインテリア、家具までトータルにデザインした作家を紹介することで幅広く読者の関心に答えている
9.団欒記のすすめ　-家族生活の一期一会-	単	1987年1月	（法）大阪市社会福祉協議会主催懸賞論文：高齢化社会への提案	高齢化社会の家族生活における“団欒”のあり方・役割を、実態調査等をもとに論じる。また、大学における、設計実習の指導において、“両親の10年後の家”をテーマ設定し、10年後のイメージを手がかりに、家族生活の20年、30年、40年後を想定し、住宅を設計するという課題を実施した。その結果の考察を通じて、20歳の女性の高齢化と団欒に対する意識について論じる。（pp.１～46）
10.脇町地域住宅計画（HOPE計画）策定調査研究報告書	共	1985年3月	建設省　pp.7～23	脇町地域住宅計画（HOPE計画）策定調査研究報告書 共 1985年03月 建設省　pp.7～23 HOPE計画策定委員会、策定幹事会 脇町地域計画の骨子として、第一に、住宅ストックの改善計画を軸とする地域定住サイクルの実現、第二に町並の再生、保存を位置づけ、その概要、それに基づく住宅政策と住宅計画、脇町としての、“魅力づくり計画”、HOPE計画実現のための“行動計画”が提案、報告されている。　分担大森（黒田）
2 学位論文				
3 学術論文				
1.鳴尾の水資源と暮らし―甲子園筋をめぐる過去・現在・未来―	単	2024年2月	武庫川女子大学社会連携推進課第8回研究成果の社会還元促進に関する発表会梗概集、pp.●－●（全6p）	水は水道栓をひねれば出てくるのが当たり前、という生活をしているが、大学がある鳴尾の地において、400年前は違っていた。近代における水系の変化、地下水の活用から、現代における水源、未来の大阪湾と瀬戸内海の在り方まで、連続5回講演を計画実施した。以下の内容と成果について報告する。 第１回「鳴尾北郷義民とその時代」 2023年10月21日（土）14:00開始　南館S-45 田中 秀哉 氏（鳴尾北郷義民追悼会代表） 第2回「枝川廃川の経緯と甲子園筋の誕生」 2023年10月28日（土）14:00開始　南館S-45 西尾 嘉美 氏（元西宮市立郷土資料館学芸員） 第3回「地下水保全　～ 宮水（灘五郷）地域の事例紹介～」 2023年11月11日（土）14:00開始　南館S-45 済川 健氏（スミカワ研究所有限会社　代表取締役） 第4回「鳴尾地域の水道とその歴史」

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				2023年12月2日（土）14:00開始　南館S-45 舩本 和弘 氏（西宮市上下水道局水道施設部長） 大垣 裕亮 氏（西宮市上下水道局水道施設部浄水課水質試験チーム主査） 第5回「これからの瀬戸内海への提言、港（海）とまちの融合を考える」 2024年1月16日（火）10:00開始　南館S-57 信時 正人 氏（ヨコハマSDGsデザインセンターセンター長、（株）エックス都市研究所理事）
2.「ある 4 4 そのこと」の真実	単	2024年	建築論研究 第3号 (2024) pp. 028 - 046	増田友也にとって、創作・設計とは、「ある 4 4 そのことの真実を、作品のう ちに移し入れ」、輝きとして顕わす行為なのである。不気味さに耐えとおしな がら探究した成果は、作品のうちに輝き響くことを約束する、その意味で希望 に満ちた実践であるというのである。したがって、初期論考においても、どの ように「ある 4 4 そのこと」と「あるもの 4444 」との絶対的差異に耐えながら、「あるも 444 の 4 」を聴従して「ある 4 4 そのこと」を探究したのか、またその真実は、輝きや響き による美しさとして現成したのか、初期論考において期待を込めて見ていきたいと思う。
3.水平と垂直の意味ーフランク・ロイド・ライトの落水荘にみる家の風景	単	2023年3月	武庫川女子大学生活美学研究所紀要, 33, p. ●-●	武庫川女子大学生活美学研究所 第32回秋季シンポジウム「「家」をめぐる思考と実践　」（2022.12.10）においてパネラーとして発表した内容を加筆修正した。フランク・ロイド・ライトの落水荘は、近代における名建築として知られ、2019年他の作品と共に世界遺産となった。しかしながら、その名に謳われた滝の扱いについて、ライトの製作意図は、外観から想像されているのみである。初期の図面とタイムス誌の表紙を飾った透視図を起点に水と天地の関係について考察し、甲子園ホテルの初期リーフレット、遠藤新による透視図との共通性などから、ライトの真意について考察した。
4.甲子プロジェクト2022 報告ー夏目漱石と“Sartor Resartus”	単	2023年3月	生活美学研究所紀要第33号、pp.●ー●	甲子プロジェクト研究会主宰者として、2021年度より、甲子園ホテルの設計者遠藤新の建築論に影響を与えたと考えられる”Sartor Resartus”(1833-34)に注目した研究会を実施している。その経緯の中で、同じく”Sartor Resartus”の著者トマス・カーライルに影響を受けたことで知られる文豪夏目漱石が、若い頃から特に”Sartor Resartus”に影響を受けていることを知り、その文学論を考察した。(F+f)をはじめ、著名な「自己本位」と、「則天去私」という漱石の文学理念と”Sartor Resartus”との関係を論述している。
5.甲子園ホテル・帝国ホテル比較研究報告書	共	2022年1月7日	日本インテリア学会日本インテリア学会期限付き研究部会(2019-2021年度)　第1部 p.1-84, 第2部 p.1-8, 資料 p.1-87, むすびと展望 p.1-4	第一部は、遠藤新とフランク・ロイド・ライトが共に影響を受けたと考えられるトマス・カーライルの『サーター・リザータス』の内容と、遠藤とライトへの影響について考察した。第二部では甲子園ホテルにおけるライト式建築としての特徴を『サーター・リザータス』の諸概念から読み解いた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
6.甲子プロジェクト研究会の報告－2021年度	単	2021年	武庫川女子大学生活美学研究所紀要，32，p. 120-130，2022-11-30	2016年度から主宰している生活美学研究所甲子プロジェクト研究会の2020年度までの経緯をまとめた。甲子園ホテルの設計者遠藤新は、建築の意図についての記述をあまり遺していない。そこで、遠藤の師・フランク・ロイド・ライトに倣い、敷地と建築の関係を知るために、周辺地域の信仰・歴史についての専門家を招くことから始めた。現在は、遠藤の理念・方法の基盤となったトマス・カーライルの『衣裳哲学』との関係に視点を置くに至った経緯をまとめている。
7.「あるそのこと」の真実ー増田友也の初期論考をめぐって	単	2020年12月28日	建築論研究会 第２号（2020年） 都市論への挑戦 ｐ.95-101 https://www.architectural-theory.jp/	増田友也の博士論文は、1年で準備されたといわれている。増田のその後の精緻な研究論文を見ると長年の研鑽が想像され意外である。一方、そこには、後の増田の建築論の柱となる「聖」、「壁」が登場している。そこで、博士論文に至るまでに建築学会に発表された初期論考（1951-1964）を整理し考察した。「壁」と「交通」、住宅における「聖」をTodasの住居に発見した際の増田のとらえ方にみられる独創性について紹介した。
8.増田友也の退官講義から聴こえる言葉 ―「森田慶一の建築論に対する増田友也の当惑感」に寄せて	単	2020年12月28日	発表雑誌：『建築論研究　第2号』 学会等の名称：建築論研究会	京都大学教授・増田友也は、退官記念講演に際して、自らが成し遂げた設計や研究について語らずに、恩師・森田慶一の出版間もない『建築論』について、「建築とは何か」という建築論について本質的な論点から語った。それは、増田の森田への「当惑感」を表すものであった。このことについて、archēを視点に考察した。
9.甲子園ホテルの企画・設計理念の背景　その2 ―「利他」を視点とした同時代の計画案との比較から―	単	2018年	武庫川女子大学生活美学研究所甲子プロジェクト報告集第2号	甲子園ホテル（遠藤新、1930）と、甲子園花苑都市におけるホテル（大屋霊城、1926）を、「利他」の視点から、ランドマークとしての特徴および計画・設計の方法について、比較している。それによって、甲子園ホテルには、近代の思想・哲学によって説明のつかない「利他」の建築表現があり、それは、仏教、特に密教的な理念に基づく可能性を指摘している。
10.遠藤新の卒業論文”Descicription on City Hotel Design”―1914年に描いた理想のホテルの理念と背景	単	2017年10月1日	武庫川女子大学教育・研究誌『生活環境学研究第5号』	遠藤新の卒業論文（英文）が卒業設計” City Hotel”のための調査分析の成果とコンセプトをまとめたものであることを解明。まず、東京帝国大学の教育環境を考察し、それを踏まえ、遠藤の思考の独自性について考察。特に、スケール、インテリア、宿泊客に対する視点、最新のホテル情報、動線計画などが、帝国ホテル支配人であった林愛作とのかなり緊密な交流から生まれたという結論を得る。また、仙台第二高等学校時代からの読書、教育環境が多きく影響していることを指摘。
11.甲子園ホテルの企画・設計理念の背景 ―「利他」と「利己」をめぐる考察	単	2017年3月31日	武庫川女子大学生活美学研究所甲子プロジェクト報告集第1号	建築設計が、建築のクライアント、だけでなく、ユーザー、立地する周辺地危機の人々のために存在するとすれば、それは建築家の「利己」ではなく「利他」の心から出発するといえる。そこで、「利他」の視点から甲子園ホテルの建築装飾と配置を読み解くと敷地を越えて広域に至ることが分かった。
12.遠藤新の理念と方法「第三のもの」についての考察―その1	単	2016年6月発行予定	日本建築学学会近畿支部研究発表予定	遠藤新が1926年に発表した「建築美術」における理念・方法の中から「第三のもの」をとりあげ、遠藤が挙げた事例とと共に考察する。帝国ホテル設計でフランク・ロイド・ライトのチーフアシスタントを務めて以来の経験から、ライトの作法を自分なりに理解した成果としてとらえると、「第三のもの」の着想は、その発表以前の作品（自由学園明日館の家具（1923）、山邑邸（1924））や記述（「卓と椅子にちなむ」（1923）、「創作の一元（1924）」）に萌芽がみられ、合わせて考察している。
13.甲子（きのえね）プロジェクトーシンボル・マーク・打出の小槌の意味と背景	単	2016年	武庫川女子大学生活美学研究所紀要　第26号	甲子園ホテル（1930）を特徴づける打出の小槌の装飾の意味について、開業当時のパンフレットを対象に読み解く。建築家遠藤新と、常務取締役兼支配人だった林愛作とのコンセプトの共有を前提に、計画・設計理念を考察。甲子プロジェクト構想の基盤となる。
14.詠歌における心―「有心体」によせて	単	2015年10月1日	生活環境学研究第3号、p.22-27	藤原定家の『毎月抄』における「有心体」について、和歌創作における理念・方法として考察した。『毎月抄』は、和歌を詠む心とその結果得られる和歌の質についての記述である。創作論として読み解くことで、衣服・インテリア・建築にも援用可能ではないかと仮設を立てた。茶道における「侘」概念を立てた武野紹鴎が、古今伝授を受けるほど打ち込んだ和歌から「侘」概念を得ていることが研究の背景である。同じく定家の『詠歌大概』、『近代秀歌』を合わせて考察し、和歌の本質と役割、詠歌および古歌を学ぶ心構えなど

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				について考察した。さらに、『明月記』の参照によって、恋の歌が多い定家ではあるが、その実体験よりも、むしろ、より上位と考えられる次元（天台仏教などが関連か）での「心」の観察とそれと並行する実践経験が基盤ではないかとの結論を得た。
15.津波啓発サインのデザインプロセス	共	2014年9月	生活環境学研究No.2,p.46-51	西宮市災害対策課との官学連携で，武庫川女子大学生活環境学科黒田研究室所属学生8名と有志の学生7名で取り組んだ「津波啓発サイン」のデザインプロセスを報告している。このサインは，450mm角のキューブを5段に積んだ立体サインである。東日本大震災の津波被害を教訓とし，南海トラフ地震が起こった場合，それに伴う津波に備えて，市民の防災意識を喚起し高めていく（啓発する）ことを目的する。大学側は，完全なボランティアという立場で取り組んだ。 2012年11月，ワークショップという形式で開始し，2013年2月，武庫川女子大学案を西宮市に提出した。しかしながら，それを受けて西宮市が作成した案に，サインとして，情報提供の観点から問題がみられた。そのため，年度を超えて大学側が継続的に関わることになった。研究室では，問題がみられる理由として，立体であるにもかかわらず，立体としての検討が十分ではないことが原因ではないかと考えた。そこで，西宮市案の原寸模型を作製し，問題解決の方向を検討した。さらに，原寸模型で大学案を作成し，2013年9月に大学側の最終案を西宮市に提出した。ほぼ，それにそうデザインで，2014年3月，立体サインが設置された
16.「空間の醍醐味」について―遠藤新からみた帝国ホテルの空間的特質―	単	2014年9月	生活環境学研究No.2,p.12-21	遠藤が，帝国ホテルを建築として初めて包括的に論じたのは，1936（昭和11）年に発表した「帝国ホテルの増築に就いて」である。この中で，芸術としての建築の空間的特質を「空間の醍醐味」と名づけて論じている。本研究では，この特質について，過去の遠藤の記述や関連文献資料を参照しながら，遠藤の考えを整理し考察する。 遠藤が「帝国ホテルの増築に就いて」を記述するに至った経緯として，4年後のオリンピック開催に向けて帝国ホテル側が発表した増築案の内容と背景を概観する。「空間の醍醐味」については，遠藤がとりあげた宿泊客の感想と，建築家としての遠藤自身の考えについて検討する。後者については，建築空間のすべての寸法を人間に合わせた尺度で統一的に決定する「スケール」について考察する。また，全体から細部に至る建築の形態を，建築の構成要素の関係性によって決定する「建築的構成」について考察する
17.甲子園ホテルの装飾の特質―打出小槌に着目して	共	2014年6月	日本建築学会近畿支部研究発表会梗概集	1930年代は、日本的なるものとしての建築表現が探求され、鉄筋コンクリートの壁面と瓦屋根を組み合わせた帝冠様式が建設される一方で、茶室や数寄屋に着想を求めた作品がみられる。関東大震災以降の耐震耐火、景気の不安定と世界的な不況、大陸における日本の支配地の拡大などが、1930年に前後する建築への社会的要請の背景としてあげられる。 人の心を導く建築を目指した遠藤にとって、ライトの設計理念・方法に対して自らの独自性を打ち出す苦心は、同時に、そのような時代の要請に対する自らの回答の探求であったと思われる。甲子園ホテルでは、20年代までのライトの理念・方法を継承・展開しながら、自分なりの日本性の表現を試みた。それは、装飾性を包括した独自の空間表現となっている。本稿では、甲子園ホテルの空間構成を支える装飾の特質について、主に打出の小槌のモチーフについて考察している。
18.甲子園ホテルについての遠藤新による短い記述をめぐって	単	2013年9月1日	教育・研究誌「生活環境学研究No.」p.58-61	遠藤新(1889-1951)の設計による甲子園ホテルは、1930(昭和5)年に完成した。敬愛するフランク・ロイド・ライト(1867-1959)の作法と、日本の伝統的文化・建築との調和に取り組んだ力作である。新聞や雑誌で注目され、自らも完成を喜び、師ライトへも出来映えを報告した。ところが、甲子園ホテルについて、遠藤が自らの考えを語る文章は意外なほど少ない。竣工の年に発表された「甲子園ホテル」1)（1930)、「甲子園ホテルについて」2)（1930)、4年後の「椅子・テーブル」3)（1934)、最後が「甲子園ホテルの場合」4)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				(1936)で、いずれも作品の一面を断片的に記した短文である。 遠藤が、完成間もない東京駅(1914)についての評論を新聞誌上に連載したのは、まだ大学卒業直後であった。その後も、建築界に活字による議論を何度も仕掛けてきたほどの文章力があった。その気になれば、甲子園ホテルについてのまとまった記述を残すことは十分可能だったと思われる。少なくとも、ライトが著し遠藤が翻訳した「新帝国ホテルと建築家の使命」5)(1922)にならって、甲子園ホテルの建築的な意義や設計意図について書くことは、あり得たのではないかと思う。 したがって、遠藤の記述が、かなり断片的であることの背景には、そうなるだけの理由があったととらえることができるだろう。そして、それらの記述が書かれた背景と考え合わせるなら、むしろ短いがゆえに、遠藤自身の考えの端的な表れとして読み解くことが期待できるのではないだろうか。
19.peta＊peta―シール付き透明付箋のデザインプロセス―	共	2013年9月	教育・研究誌　生活環境学研究No.1 p.10-15	生活者に環境問題に目を向けてもらうためのメッセージの発信を意図した透明付箋シールのデザインプロセスを報告している。付箋，シール印刷の歴史を概観し，既製付箋の現状に触れ，課題を挙げるとともに機能・役割を見直した。それらをふまえて，シール付き透明付箋「peta*peta」とそのパッケージのセットを提案している。透明付箋を使用するたびに，生活者の日常生活にエコメッセージを浸透させるデザインアプローチは、他への応用可能な方法である。
20.遠藤新の建築論における基本的特質Ⅰ―中央銀行倶楽部における大陸性と日本性―	単	2010年	武庫川女子大紀要（人文・社会科学）Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., 58, 99－106 (2010)	Endo's concept for Chuo-ginko Club to clarify his original method, which might be deferent from his master; Frank Lloyd Wright's one and might deeply connect with the traditional Japanese aesthetic theory.
21.（修士論文）The Timeless Way of BuildingにおけるC. Alexanderの設計方法論についての考察	単	1983年02月	京都工芸繊維大学	The Timeless Way of Buildingを全訳し、主要概念を考察、分析し、副論文として、A Pattern Languageを随時参照することによって、C.Alexanderの設計方法論の解明を試みている。特に第Ⅰ部では主要概念の分析を、第Ⅱ部では実践手段の検証を行なっている。(pp.1?367)
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1.「西宮地域の歴史と暮らし」ー武庫川女子大学生活美学研究所における活動からー	単	2024年2月23日武庫川女子大学 生活環境学科 H2-321	道具学会 2023年度 道具学研究発表フォーラムにおいて	2016年から始めた武庫川女子大学生活美学研究所甲子プロジェクト研究会の成果を、（１）研究会の目的と方針、（２）鳴尾地域の水資源と暮らしの歴史（３）トマス・カーライルの『サーター・リザータス』の観点から考察紹介した。
2.鳴尾の水資源と暮らし―甲子園筋をめぐる過去・現在・未来―	単	2024年2月15日公江記念館　B109	社会連携協議会 第8回研究成果の社会還元促進に関する発表会 武庫川女子大学 社会連携推進課主宰	2023年度「鳴尾の水資源と暮らし」と題して、連続5回講演を行った。その成果と今後の展望について発表した。
3.甲子園ホテルにみる「聖地」の潜在性 近代と交差する土地の記憶と建築表現	単	2024年1月20日武庫川女子大学 甲子園会館	武庫川女子大学 生活美学研究所 第33回シンポジウム『野球聖地「甲子園」の景観と興趣』	遠藤新の設計した甲子園ホテル（現甲子園会館、1930）は、抽象・具象の装飾表現が、敷地周辺と調和した空間構成においてなされている。それらを読み解くと、地域の水系の歴史から世界平和までを表現していると考えられ、古今東西の建築においてもあまり例が見られず、当時の時代背景や、今日の地球環境の観点からも聖地としての潜在性をもつといえるだろう。
4.甲子園ホテル（遠藤新）のサスティナブ	単	2022年11月12日	日本インテリア協会、輝く未来に繋	甲子園ホテルの建築装飾と配置が、大地から天を仰ぎ恵みの雨を求め、それは、ホテル内に留まらず、周辺地域に渡されるという物語

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
１．学会ゲストスピーカー				
ルな設計思想を探る			がるデザインデザインカンファレンストーク　第12回	を表現している。さらに、大宴会場には、世界平和の祈りの表現がみられる。それらが、視覚表現だけでなく、ホテルに関わった人々のネットワークと密接に結びついていることを映像と共に紹介・解説した。
5.「あるそのこと」の真実ー増田友也の初期論考をめぐって	単	2022年3月26日	建築論研究会ワークショップ	増田友也の博士論文は、1年で準備されたといわれている。増田のその後の精緻な研究論文を見ると長年の研鑽が想像され意外である。一方、そこには、後の増田の建築論の柱となる「聖」、「壁」が登場している。そこで、博士論文に至るまでに建築学会に発表された初期論考（1951-1964）を整理し考察した。「壁」と「交通」、住宅における「聖」をTodasの住居に発見した際の増田のとらえ方にみられる独創性について紹介した。
6.甲子園ホテルをめぐる―遠藤新とフランク・ロイド・ライト	単	2021年10月24日	日本インテリア学会大会	日本インテリア学会第33回大会は、コロナ禍においてオンライン開催となった。旧甲子園ホテルの見学会は、オンラインでおこなうことになった。ナビゲータとして、インテリアの撮影、ドローンにおる空撮を、できるだけリアルな空間体験に引き寄せながら1時間の動画として編集した。近代技術ゆえに可能になった大規模開発地甲子園とホテルの関係、翌年満州事変が勃発する時代に平和への祈りを込めた建築装飾やインテリア空間などを解説のポイントとした。
7.打出の小槌と共に一光と水の建築	単	2015年7月25日	第57回意匠学会大会シンポジウム「ライト式建築の諸相」	甲子園ホテルの装飾の中から、打出の小槌をモチーフとしたものを取り上げ、そのバリエーションと配置された空間の特徴を対比して紹介。また、食器・パンフレットなどにトータルでシンボルをモチーフとして用いることは、師・ライトの帝国ホテルにも実現できなかったこととして指摘。それを踏まえて、パンフレットのグラフィックな特徴を読み解き、装飾と地域の文化や時代の出来事との関係を設計者・遠藤新の独創性として紹介した。
8.Metabolism in Japan in 1960's	共	2000年12月	Werkstatt fu [¨] r Kulturgeschichte Kolloqium f [¨] r Architektur- und Kunst geschichte f [¨] r Forscheude und Interessierte	Metabolism could be seen as both the presentation of Japanese identity in 1960 and the Japanese avant-garde movement in 1960s. The back ground of it is discussed from the view point of the political, economic and urban problems. The direction of each methodology is estimated from the requirement of urban living at that women.
２．学会発表				
1.トマス・カーライルの『サーター・リサータス』における「神」および「神性」―遠藤新の建 築論における基本的概念としての考察―		2023年9月14日	日本建築学会2023年度大会梗概集, pp.//-//	遠藤新は、1922年、フランク・ロイド・ライトのチーフ・アシスタントを辞し『遠藤新建築創作所』を開設し独立した。翌年の帝国ホテル完成に向けて現場管理の仕事が続く一方、自由学園の家具を手掛けている。『婦人之友』に発表した「テーブルと椅子に因む」（1923）において、遠藤は、以下のように述べている。 「神のように物が創れたらよいと思う、しょせん、建築家の目ざすところは「神の如く」にしかない1）。」 文中、「しょせん」という言葉には、建築の理想を定めるまでの模索の期間と、その結果たどり着いたのが「神の如く」であることが伺える。ライトとの出会いから5年、東京帝国大学建築学科入学から11年がたっていた。 遠藤は、帝国大学入学2か月後、植村正久が開設した富士見町教会（1887，東京都千代田区）で洗礼を受けプロテスタントとなった。遠藤の入信の背景には、いくつかの外的要因があろうが、内的には、布教者の話に真心からの愛や「祈り」を感じ、かつ西洋文化の基底にあるキリスト教を思想として理解したいと考えたからだ2）といわれている。この志向の元をたどると、帝大入学前、仙台第二高等学校で土井晩翠を通じて深く影響を受けた『サーター・リザータス』（1833-34，以下『SR』と略記）にいきあたる。「身体」と「衣服」との関係をモデルに文明のあらゆる事物を説明し、その関係はさらに「神」と「自然」の関係に及ぶ。そこには、文明論的視点を網羅した上での超越的視点がある。著者のトマス・カーライルは、

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				プロテスタントで新・旧の『聖書』を数多く引用している。遠藤が、『SR』から得た建築の理想を携えて帝大に入学したとすれば、『聖書』の理解を深めることは自然だったと考えられる。教会には、それぞれ教育や政治の理想と実践のために、羽仁吉一・もと子夫妻や星島二郎が来ており、この時期から交流が開始した。 「神の如く創る」は、その後も遠藤の初心として、「住宅小品15種」（1924）、「創作の一元」（1924）に繰り返され、「建築論」（1926）では、建築家の理想・立場として引用される。そこで、本稿では、遠藤にとっての「神」または、「神性」の内容を『SR』にもとめ考察を行う。特に、将来自らの仕事を通じて社会貢献を志す若者が、内的改革や心の平和を伴い得るような道標として考察する。
2.『サーター・リザータス』における建築および建築家-「衣裳」および「裁縫師」としての考察-	単	2023年6月25日	日本建築学会近畿支部研究発表会梗概集，pp.//-//	トマス・カーライルによる『サーター・リザータス』（1933-1934）は、「身体」と「衣裳」の関係を二元論的モデルとして、人間がつくり出した文明のあらゆる事物を説明し、さらにそれを「神」と「自然（宇宙）」の関係にまで拡大し適用している。19世紀の欧米諸国だけでなく、明治日本の著名人の心を惹きつけ、昭和初期まで読まれた。建築家・遠藤新と、その師フランク・ロイド・ライトは、異なる時期と場所で『サーター・リザータス』に大きな影響を受けていたと考えられる 。 そこで、前稿では、「衣裳」を建築に置き変えて考察するための前提として、「身体」と「衣裳」の関係を文明論的視点と超越的視点とから考察した。カーライルは、人間の「心」の中にある「神性」を「神」と同質ととらえることによって、「身体」と「衣裳」の関係を「神」と「自然」の関係に繋いでいる。「神」といえば、一般に畏怖の念を起こさせるものであろうが、カーライルによれば、「神性」とは、「自我」を取り去ることで得られる「他者への無限の慈愛」として経験される。この「神性」は、カーライルにとって、時代に合わせて「衣裳」を作り直すことによる社会改革とその目標としての世界平和の根本と位置付けられる。そうであるならば、「神性」は、遠藤とライトの建築理念・方法の解釈に際しても不可欠な概念として捉えられる。 また、前稿では、登場人物についても考察した。ドイツ人哲学者・トイフェルスドレックの創始した難解かつ奇妙な「衣裳哲学」を、イギリス人編集者である「私」が、イギリス国民のために抄出し、批判・賛同しながら紹介・解説する。この設定により、 読者自身が、過去から現在までの事物について、や はり「身体」と「衣裳」という視点で、自らの思索 と判断を促される。遠藤やライトもそのような読者であったと推察される。 遠藤が、ライトに出会う（1917.4）以前から、すでに建築について相当の考えをもっていたことは、井上祐一 が指摘し、遠藤陶 、南迫哲也 はカーライルによる影響に言及している。 本研究は、遠藤が、東京帝国大学建築学科に入学する前に出会った『衣裳哲学』が、遠藤の建築への志の元になったとする立場を取る。そこで、本稿では、『サーター・リザータス』にあらわれる建築および建築家について文脈にそって考察する。
3.Sitzmaschine と LC4 の比較 ―「機械」と「心地よさ」を視点として―	単	2022年10月29日	日本インテリア学会研究発表会梗概集、pp.●-●	Sitzmaschine(1905)は、創作活動が長かったヨーゼフ・ホフマン(1876-1957)の初期作品に位置づけられる。ホフマンはこの年29歳、コロマン・モーザーらと1903年にウィーン工房を設立してから2年しか経過していない。一方、LC4（1928）は、ル・コルビュジエ（1887-1965）がシャルロット・ペリアン、ピエール・ジャンヌレとともにデザインし、1929年のサロン・ドートンヌに出展した。コルビュジエは発表時42歳、すでにワイゼンホーフジードルンク(1927)に参加、数年後にはサヴォワ邸を完成させる時期である。これら二つの椅子は、素材・機構・形態が異なり、相互間に20年以上の時の経過がある。 しかしながら、これらは、リクライニングができる寝椅子という用

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				途としての共通性がある。しかも、ホフマンは、Sitzmaschineつまり文字通り「座る機械」と名付け、コルビュジエは、LC4を「休養のための機械」と呼んだ。どちらも寝椅子の性能を機械のように追求したコンセプトにおいて明らかな共通性がある。コルビュジエが自らの『建築を目指して』（1923）で述べた「住宅は住むための機械である」があまりに有名なためか、ホフマンの「座る機械」はどちらかといえばあまり関心を持たれないかもしれない。一方、コルビュジエの「住むための機械」が、『エスプリヌーボー』への寄稿に遡るとしても、「機械」という概念を制作姿勢として表したのは、ホフマンの方がずっと早いのである。また、コルビュジエが1908年にオーギュスト・ペレ、1910年にペーター・ベーレンスの下で短期間働いていることは、新技術への高い関心へと受け取れるが、ホフマンにも接触した時期がある。彼の下で働くことはなかったようだが、新芸術という観点から賞賛の言葉を残している。以上を前提に、ホフマンのSitzmaschine と コルビュジエのLC4 について比較をおこなう。
4.トマス・カーライルの『サーター・リザータス』における建築概念	共	2022年9月	2022年度大会（北海道）学術講演梗概集、日本建築学会、pp.27, 28	トマス・カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)の『サーター・リザータス』(Sartor Resartus2), 1934は、19世紀のイギリスのみならず欧米諸国、さらに明治期の日本の知識層にも広く読まれた。その中には、建築家もおり、フランク・ロイド・ライト（1867-1959）の「建築のために」（In the Cause of Architecturel）, 1908）の重要な箇所に引用され、その弟子遠藤新（1889-1951）の卒業論文「都市ホテル設計の解説」(Description on City Hotel Design, 1914)、さらにル・コルビュジエ（1887-1965）の『今日の装飾芸術』(L'art décoratif d'aujourd'hui, 1925)などにも影響が伺える。 カーライルは、「人間」と「衣服」の二元論を用いて、あらゆる事物の説明・考察を試みている。その際、その二元論を、文明論的意味と、超越的意味との両方に適用しているところに特徴がある2)。その二元論においては、さらに「人間」が「心身」として、「心」と「身体」に分けられるのであるが、本稿ではまず「人間」と「衣服」の二元論に着目する。「 カーライルは、人間がつくり出す事物の例として、それほど多くは無いが「建築」についても述べている。本稿では、「建築」についての言説を取り出し、「人間」と「衣服」の二元論を視点に考察を行う。『サーター・リザータス』に影響を受けた建築家がたどった道筋を検証するために、その手がかりを得ることを期待するからである1)。 同時に、カーライルは、「人間」に適した「衣服」を創る「裁縫師」についても述べている。そして、「建築家」についても言及しており、合わせてみていきたい。
5.The Methodologies of Metabolism in the 1960s: Organic City in Japan - Megastructure	単	2022年7月	International Planning History Society 10th Conference (CD ROM)	Organic city is an ideal city model presented as the common concept of Metabolism, which was Japanese avant-garde movement in the 1960s, in order to respond flexibly to city needs which were changing swiftly and rapidly. In this thesis, I will divide methodologies, proposed by Metabolists for the purpose of realizing an organic city, into two groups and call each of them megastructure and group form. The Metabolists developed megastructure to realize the order of city space from an architectural to gigantic scale. In megastructure, they dealt with an architecturally composing scale or factor as a subject of their design: those scales or factors included for instance, architecture, city, and sometimes even country. The Metabolists explained the effectuality and possibility of megastructure by using an analogy of the growth and transformation of an individual cell division. I will examine the organism of megastructure by focusing on a living thing.
6.『サーター・リザー	単	2022年6月	日本建築学会近畿	サーター・リザータス』（1933-1934）はスコットランドの歴史家・

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
タス』における「心身」と「衣服」の二元論についての考察―「衣服」を「建築」に置き換える前提として			支部研究報告集第64号 『	評論家・思想家として知られるトマス・カーライル（1795-1881）による思想・哲学的特徴を持つ文学作品である。資本主義の発展により産業構造、社会階層、生活様式などが変化し貧富の差が顕著になった19世紀のイギリスで、教会から離れていった知識人の心の拠り所となったといわれている。カーライルが、理論的整合性が無い哲学と自ら評した「衣服の哲学」としての『サーター・リザ―タス』には、それでもなお、近代日本の理想を各分野で担った明治の著名人の心を捉えた深さと広がりがあったのだと思う。本稿では、「心身」と「衣服」の二元論に着目し、その特徴について考察する。
7.『衣裳哲学』における諸概念についての試論	単	2021年10月23日	日本インテリア学会第33回大会研究発表梗概集、p.40,41	トマス・カーライルの『衣裳哲学』は、建築家遠藤新とその師フランク・ロイド・ライトの設計理念の基盤となっていることが分かっている。そこで、『衣裳哲学』の主要理念として心身と衣服、裁縫師、象徴、有機的繊維について遠藤とライトの共通点と相違点を考察した。
8.フランク・ロイド・ライトの「建築のために」におけるトマス・カーライルの『衣裳哲学』の影響	単	2021年7月	日本建築学会大会学術講演梗概集 巻　号：2021 ページ：105-106 年月次：2021-07	近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトの「建築のために」（1908）において、トマス・カーライルの『衣裳哲学』（1934）が引用されている。引用箇所について、「建築のために」と『衣裳哲学』の文脈のそれぞれから、ライトが『衣裳哲学』を自らの設計理念において重視ていたことを明らかにした。
9.遠藤新の卒業論文「シティホテル設計の解説」における三つの理念	単	2021年6月	日本建築学会近畿支部研究報告集	遠藤新の卒業論文（1914）には、後の帝国ホテルの設計において直接師と仰ぐことになったフランク・ロイド・ライトの同時代の作風とは全く異なる建築表現をとっている。ライトの論考・著作はすでに出版されていたため、遠藤は、作風をトレースすることも可能だったはずである。そうしなかった理由を、主に立面について述べた章の３つの理念から考察した。それは、①内面感情の表現、②芸術の本質しての生命、「③どの様式か」ではなく「様式とは何か」である。これらとライトの言説との関係を考察した。
10.甲子園ホテル大宴会場前の水盤の意味と役割	単	2020年10月25日	日本インテリア学会研究発表梗概集第32回,p.6,7	甲子園ホテルの大宴会場前の水盤の意味について内部空間における意味と、立地条件から見た意味の両側面から考察した。外部との関係からかは、近代技術による枝川廃川と地下水の活用が考えられ、地下水活用の未来を祝福して大宴会場に入ることが意図されたと考えられる。
11.遠藤新による建築の「正義」について帝国ホテル礼賛の背景		2020年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集 巻　号：2020 ページ：471-472 年月次：2020-09	遠藤新は帝国ホテルの完成に際し、師フランク・ロイド・ライトをミケランジェロに代わる希代の天才と礼賛した。それは、正義を貫ける建築家であるという意味においてであった。天才の建築芸術と、遠藤が言う「正義」の関係について、遠藤が影響を受けたトマス・カーライルの『衣裳哲学』における「利他」としての真我、精神の発展を視点に考察を試みた。
12.甲子園ホテルの敷地条件としての「水」―旧枝川の伏流水による２つの水源地の役割―	単	2020年6月	日本建築学会近畿支部研究報告集計画系 巻　号：60 ページ：477-480 年月次：2020-06	遠藤新が、甲子園ホテルの設計のために読み取った敷地条件を明らかにした。阪神電鉄による甲子園経営地の開発により西宮市武庫川下流域の水系及び水源の変化と役割を。甲子園ホテルの位置関係と合わせて考察している。それによって、甲子園ホテルの庭園景観の重要な要素である大湯池に2つの「利他」の意味があることを明らかにした。
13.甲子園ホテル大宴会場における装飾の特質－仏教寺院における天蓋との類似に着目して	単	2019年10月26日	日本インテリア学会第31回大会研究発表梗概集p.45,46	甲子園ホテル大宴会場を特徴づける黄金の装飾について、設計者の遠藤新が自らの「建築美術」についてのべた「だい3のもの」という考え方に基づいて考察している。テラコッタタイルとをキリスト教の十字架（第一のもの）とした場合、黄金の装飾が仏教寺院の天蓋（第二のもの）を表し、それらが打出の小槌（第3のもの）を表すことになり、黄金の装飾と打出の小槌に設計者が与えた意味を示唆する。そこで、宗派によって頃なる天蓋と、黄金の装飾の関係を考察した。
14.甲子園ホテルの設計理念と背景-「利他」からみた密教との関係について	単	2019年9月3日	日本建築学会2019年大会梗概集 巻　号：2019 ページ：493-494 年月次：2019-07	建築家が「公共」にふさわしい表現を真摯に追求しても、その記述を公表することが難しい場合がある。建築家自身の精神世界が根差す宗教・信仰、あるいは、それらを自らが所属する社会が容認するかどうかなどの時代性が要因となる。 1930(昭和5)年に完成した甲子園ホテルの場合、設計者・遠藤新（1889-1951）は、会心の作の設計理念について、ほとんど言葉を残

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				していない。本稿では、学生時代から交流のあった支配人兼常務取締役・林愛作（1873-1951）との関係に着目し、他者を利する「利他」を視点に天台密教との関係について概観する。密教の教義や境地を、一般の在家に言葉で伝えることは、禁じられているからである。 さらに、甲子園ホテル完成の翌年が満州事変(1931)であったことを考えると、迎賓館としての日本的建築表現のために遠藤が苦慮した側面があったのではないかと思う。 以上を前提に、遠藤の建築理念と密教との関係を考察する。
15.甲子園ホテルの装飾の特質2 テラコッタタイルとその配置	単	2019年6月22日	日本建築学会近畿支部2019年度研究発表会梗概集 巻　号：59 ページ：513-516 年月次：2019-06	甲子園ホテル(1930)の壁面を覆うテラコッタタイルは、日華石の彫刻や緑の瓦屋根と共に格調高い装飾性を担っている。正方形のタイルに描かれたレリーフによる装飾は、四角形をモチーフとしている。同じ形状の角を4つ合わせ、4枚を1組として配置することによって、新たに十字形パターンが浮かび出るように工夫されている。 設計者・遠藤新(1889-1951)は、キリスト教を信仰し、建築を通じて社会改革と世界平和を目指したことから、テラコッタタイルが形成する十字形パターンには十字架としての意味を込めた可能性が指摘できる。 　一方、甲子園ホテルは、教会ではなく世界の賓客が宿泊するホテルである。当然、それにふさわしい建築表現が求められた。当時において、それは、明治期に定められた国家神道に抵触しないことが絶対条件であった。　これらを前提に、本稿では、テラコッタタイルとその配置に着目して装飾としての特徴と意味を考察する。
16.甲子園ホテルの宴会場における空間構成と装飾の関係 その2 ―前室から庭へとつながる豊穣の水の流れの表現―	単	2018年10月21日	日本インテリア学会大会梗概集	設計者・遠藤新（1889-1951）を招聘した支配人兼常務取締役・林愛作（1873-1951）が、アーネスト・フェノロサ(1853-1908、遺言により三井寺(天台宗)に埋葬された)と深い親交があったことや、遠藤の妻の実家の宗派と遠藤自身の菩提寺が天台宗であることを合わせ、甲子園ホテルの打出の小槌は、天台密教とその護法善神・大黒天の「利他」にまで遡って大黒天を象徴するのではないかと考えるに至った。そのような視点から、当時の国内の社会状況や外交方針を背景にインテリア・建築空間を読み解くと、「西の迎賓館」といわれた甲子園ホテルには、家にいるようなくつろぎを伴った「空間の分かち合い」など、異文化の尊重と世界平和を祈る独創的な空間表現が見出せた。 このことを前提として、本稿では、「豊穣の水」による「利他」の物語が、甲子園ホテルの西翼宴会場とその周辺にどのように表現されているのかを、空間と装飾を視点に考察する。
17.遠藤新の卒業論文”Descrition on City Hotel Design”についての考察	単	2018年9月6日	日本建築学会　大会学術講演梗概集(東北) 巻　号：2018 ページ：231-232 年月次：2018-07	建築家・遠藤新（1889-1951）の卒業設計‘City Hotel1）’(1914)は，『建築家遠藤新作品集2）』（1991）に掲載されているが，卒業論文の掲載は無く，表題・内容ともに未確認だった。遠藤の母校である東京帝国大学（現・東京大学）建築学科の図書館で、卒業論文“Description on City Hotel Design3）”（1914)を，閲覧することができた。 卒業論文からは、遠藤が，自分なら新しい帝国ホテルのためにどのような建築を設計するか，この時点で相当具体的に想定して取り組んだことが推察される。本稿では、卒業論文の内容と構成を概観し、特に敷地設定と平面計画について帝国ホテル支配人・林愛作（1873-1951）との関係を考察する。
18.A Comparative Study of Two Hotels from the Perspective of “Altruism” - Development Plans of the Koshien Area in the 1920’s	単	2018年7月18日	International Planning History Society, 18th Conference, Yokohama, Kanagawa, Japan	This paper compares Koshien Hotel of Arata Endo(1889-1951) with the proposed hotel in the Koshien Kaen City Plan of Reijo Oya (1890-1934) from the perspective of “altruism. First, I will examine the two hotels from the viewpoint of the customer target and the possible activities related to the features of the architecture. Next, I examine them from the viewpoint of the relationship between the hotel and the surrounding environment. The two sites are in such contrast to each other with Oya’s site at the south, facing the bright spacious ocean, while Endo’s hotel stands in a dense pine forest facing a clear pond. Endo rarely expressed his

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				views in writing but seems to have considered the pond when planning the shape and design of Koshien Hotel.
19.甲子園ホテルの宴会場における空間構成と装飾の関係 ―天井周辺の形状と打出の小槌をモチーフとした装飾に着目して―	単	2017年10月	日本インテリア学会大会第29回研究発表梗概集 2017年10月	甲子園ホテルの大宴会場は、17.3m×10.3mの広さで、天井高は、4.9m高いところは7.3ある。この空間は、約10mの巨大な長押と黄金装飾のある四角錘の天井で構成されている。長押は、実質的に構造材ではないので、設計者・遠藤新の空間の意図を表現すると考え、空間構成についての考察をおこなった。
20.遠藤新と野田俊彦による「建築論」の比較 芸術としての建築をめぐって	単	2017年7月	日本建築学会大会梗概集 巻　号：2017 ページ：811-812 年月次：2017-07	『アルス建築大講座』（1926）には、5つの「建築論」が寄稿され、建築論という分野における萌芽的な論考として位置付けられる。このうち、遠藤新と野田俊彦の「建築論」は、建築が芸術であるかどうかについて対極の立場をとる。二人の背景の共通性を踏まえ、①建築とは何か②用と美③建築は芸術なのかの三点を視点に比較した。
21.遠藤新の理念と方法「第三のもの」についての考察―その1	単	2016年6月25日発表予定	日本建築学学会近畿支部	日本建築学学会近畿支部研究発表 遠藤新が1926年に発表した「建築美術」における理念・方法の中から「第三のもの」をとりあげ、遠藤が挙げた事例とと共に考察する。帝国ホテル設計でフランク・ロイド・ライトのチーフアシスタントを務めて以来の経験から、ライトの作法を自分なりに理解した成果としてとらえると、「第三のもの」の着想は、その発表以前の作品（自由学園明日館の家具（1923）、山邑邸（1924））や記述（「卓と椅子にちなむ」（1923）、「創作の一元（1924）」）に萌芽がみられ、合わせて考察している。
22.打出の小槌と共に―光と水の建築	単	2016年2月	意匠学会誌　デザイン理論６７号 p.124～125	平成27年度意匠学会シンポジウム「ライト式建築の諸相」の内容を報告
23.甲子園ホテルの装飾の特質―打出の小槌に着目して	単	2014年9月	日本建築学会大会（神戸大学）	人の心を導く建築を目指した遠藤にとって、ライトの設計理念・方法に対して自らの独自性を打ち出す苦心は、同時に、時代の要請に対する自らの回答の探求であったと思われる。甲子園ホテルでは、20年代までのライトの理念・方法を継承・展開しながら、自分なりの日本性の表現を試みた。それは、装飾性を包括した独自の空間表現となっている。本稿では、甲子園ホテルの空間構成を支える装飾の特質について、主に打出の小槌のモチーフについて考察している。（同年6月に近畿支部で発表予定だった内容について整理した）
24.Study on the Relationship between the theory by Ebenezer Howard and by Kenzo tange -The Growth of City and the People’s Life	単	2014年7月22日	International Planning History Society, 16th Conference, St. Augustine, Florida, USA	“A Plan for Tokyo” by Kenzo Tange in 1961 was represented for the capital city Tokyo, of which population should be positively accelerated to be 10,000,000. On the other hand, “ Garden Cites of To-morrow” by Ebenezer Howard in 1898 was represented for the city of 30,000 populations, to reduce the peoples’ inflow to London. Both Tange and Howard used the word growth when their city model got more population, gave the life model to the people who added the city population and observed the character of the city which attracted the people . In this paper the theory of Tange and of Howard will be compared from the following points. 1. The order of the growth of city 2. The direction of urban life of people 3. The organization of city 4. The role of city for nation
25.甲子園ホテルの装飾の特質―打出小槌に着目して		2014年6月	日本建築学会近畿支部研究発表会梗概集	1930年代は、日本的なるものとしての建築表現が探求され、鉄筋コンクリートの壁面と瓦屋根を組み合わせた帝冠様式が建設される一方で、茶室や数寄屋に着想を求めた作品がみられる。関東大震災以降の耐震耐火、景気の不安定と世界的な不況、大陸における日本の支配地の拡大などが、1930年に前後する建築への社会的要請の背景としてあげられる。 人の心を導く建築を目指した遠藤にとって、ライトの設計理念・方

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				法に対して自らの独自性を打ち出す苦心は、同時に、そのような時代の要請に対する自らの回答の探求であったと思われる。甲子園ホテルでは、20年代までのライトの理念・方法を継承・展開しながら、自分なりの日本性の表現を試みた。それは、装飾性を包括した独自の空間表現となっている。本稿では、甲子園ホテルの空間構成を支える装飾の特質について、主に打出の小槌のモチーフについて考察している。
26.A Study on the Concept of Theory for City Planning by Kenzo Tange - The relationship between the Highest Value of the City and the People's Life	単	2012年7月18日	IPHS 15th Conference, Sao Paulo, Brazil	“A Plan for Tokyo 1960” is only the one theory which Tange used the metaphor of living things. Then we can get the question: How Tange got the organic city model for “A Plan for Tokyo 1960” and why he get rid of it? “Life” must be the highest value of the city, if we use the organic living city model. So we can reach the next question: How relate the “highest value” of the city to people's “life” ? I should like to exam this question on “A Plan for Tokyo 1960”, refer ring to “The regional structure and architectural form in large cities”(1951) and “The future image of Japan Peninsula ? The Construction forward the Twenty First Century”(1966) written by Tange.
27.The Role of the Women in Masque of Learning	単	2010年7月14日	IPHS 14th Conference, Istanbul, Turkey	The aim of this paper is to exam the role of the women in the Masque of Learning, focusing the first and the very successful one realized by more than three hundred volunteers including many women in Edinburgh in 1912. The materials of the research are “ Cities in Evolution” (1914) and the pamphlets, the papers and the books mainly published by Out Look Tower since 1900 until 1915.
28.甲子園ホテルに関する研究一設計図の変遷から空間構成の意図を探る	共	2010年	平成22 年度日本建築学会 近畿支部研究発表会梗概集 p.793-796	甲子園ホテルを特徴づける空間構成について、設計者遠藤新（1889－1951）の意図を、現存する図面から明らかにする。 現在の甲子園ホテルを観察するだけでなく、ホテル計画時～竣工された当時までに遠藤新が実際に描いたか、または指示して描かれた設計図を対象に、遠藤の空間構成の意図を読み解いていくことが、この研究の目的である。 遠藤新は、甲子園ホテルに関してそれほど多くの言葉を残していない。しかしながら図面の変遷をたどることで、遠藤が語らなかった意図が見えてくるのではないかと考える。図面は、ホテル計画初期（1928 （S3）年）から竣上直後（1930 （S5 ）年）の間に描かれた、3 種類の図面を研究の対象とする。
29.甲子園ホテルにおける水の表現西翼部装飾の特質	共	2010年	平成22 年度日本建築学会 近畿支部研究発表会	甲子園ホテルは、1920 年代に日本に受容されたモダニズムに対して、歴史主義と共通する様式性と装飾性に特徴がある。例えば、ホテルのシンボルとして「打出の小槌」を用い、それをモチーフとした装飾が建築の内部・外部から食器に至るまでに施された。モチーフの選択はホテルの立地に由来するといわれ、「打出の小槌」を持っ大黒天は豊作、金運、富貴、長寿などを司る。ホテルが結婚式場としても用いられたこと、経営上の成功などを考え合わせ、ホテルの守り神にふさわしい。しかしながら、甲子園ホテルの装飾は、単に「打出の小槌」のみによるとは言い難い。例えば、壁面を覆うテラコッタ・タイルや石彫のレリーフは、円と正方形を基本モチーフとした意匠である。
30.甲子園ホテルに関する研究一設計図の変遷から空間構成の意図を探る	共	2010年	平成22 年度日本建築学会 近畿支部研究発表会	甲子園ホテルを特徴づける空間構成について、設計者遠藤新（1889－1951）の意図を、現存する図面から明らかにする。 現在の甲子園ホテルを観察するだけでなく、ホテル計画時～竣工された当時までに遠藤新が実際に描いたか、または指示して描かれた設計図を対象に、遠藤の空間構成の意図を読み解いていくことが、この研究の目的である。 遠藤新は、甲子園ホテルに関してそれほど多くの言葉を残していない。しかしながら図面の変遷をたどることで、遠藤が語らなかった意図が見えてくるのではないかと考える。図面は、ホテル計画初期（1928 （S3）年）から竣上直後（1930 （S5 ）年）の間に描かれ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				た、3 種類の図面を研究の対象とする。
31.Comparison of the Image of People's Lifestyle in the City-According to City Theories of Patrick Geddes and Kenzo Tange	単	2006年12月13日	IPHS 12th Conference, New Delhi, India	Patrick Geddes and Kenzo Tange both presented an organic city model, with the city asn an analogy of a life force, illustration each and everyone's life style image.In this research, both creator's city life images tha t hint at the Value of their city models are compared, with thier differences analyzed. Referred works are Geddes' "Cities in Evolution"(1914) and Tange's "A Plan for Tokyo, 1960"(1961)
32.The Methodologies of Metabolism in the 1960s - The Theory and the Practice of the Model of Organic City in Japan	単	2002年07月	The 10th International Planning History 10th Conference, London, England	I will discuss the methodologies of Metabolism as follows:□(1) the common concept of organic city, compared with the urban condition;□(2) each methodology as the way of solution to the urban problems; and□(3) the main worls from the viewpoint of the effect of the methodologies.
33.Metabolism in Japan in 1960's	単	2000年12月	Werkstatt fu [¨] r Kulturgeschichte Kolloqium f [¨] r Architektur- und Kunst geschichte f [¨] r Forscheude und Interessierte	Metabolism could be seen as both the presentation of Japanese identity in 1960 and the Japanese avant-garde movement in 1960s. The back ground of it is discussed from the view point of the political, economic and urban problems. The direction of each methodology is estimated from the requirement of urban living at that women.
34.祭事空間の仮設配置と「しつらい」の意味　その２	単	1996年08月	日本インテリア学会	「しつらい」（及び「しつらう」）の表記の整理・検討を行うことを目的とする。意味・内容を参照したのと同じ辞典から、仮名及び漢字表記を取り出し、「しつらい」及び「しつらう」について同様の作業を行っている。また、これらの辞典類が参照する古辞書、辞典についても同様の作業を行っている。さらに、各字義についても、「大漢和字典」における記述を要約し整理している。
35.祭事空間の仮設配置と「しつらい」の意味－辞典類における語釈をめぐって－	単	1995年10月	日本インテリア学会	伝統的祭事の際に一時的に立ち現われる空間は、装飾・道具・建築等を仮設的に配置することで成立している。本論ではこれらの仮設配置に相当する語として「しつらい」を取りあげ、その意味、内容を明らかにすることを目的とする。いわゆる定説の整理という立場から、辞書・辞典類における「しつらう」及び「しつらい」の語釈を収集し、先に「しつらう」について整理・分類し、これをふまえて「しつらい」について考察する。
36.諸研究にみる〈祭事〉概念　薗田稔による祭の構造論　A Study on Concepts about Saiji in the Resedrches of Related Field　Ou Stwcture of Maturi in Miuoru Souada's Articles.	単	1993年11月	日本インテリア学会第５会大会研究発表梗概算 第５巻　Summaries of the 5th Aunadl Couference of Japan Society for Interior Studies.	祭事の空間的特質を建築学的に分析する立場からの“祭事の〈場〉の構造化”という研究テーマにむけて、他の関連専門分野における適切な方法論の参照・援用を目的としている。文化人類学、民俗学等において、総体として祭事を捉え、祭事自体の構造を提示したり、場・空間に言及しているものが見られ、その中から薗田稔を取りあげ、構造概念について整理、検討を行なっている。特に“表象の構造”について“祭儀”と“祝祭”の２局面の様式特性、表象、様相、作用等を考察する。
37.火を主題とする祭事の道立てについて -京都の盆行事を中心に-	単	1992年11月	日本インテリア学会　第４回大会研究発表梗概集（1992）（pp.68-69）	祭事の場の構造化に関する研究のための基礎的資料の作成という位置づけで、本稿では京都市内における盆行事の中で特に火を主題的に用いたものを取り上げ、祭事の場を構成する道具立ての内容について、用いられる道具の種類・特徴やそれらを用いた演出的なプロセスなどに着目して整理・考察を行う。
38.祭事の場の構造化に関する研究	単	1991年11月	日本インテリア学会　第３回大会研究発表梗概集	祭事が内包する諸相を〈内容〉と〈形式〉という２つの視点から捉え、祭事が現出する場の特質を構造的に解明するために行った調査事例と分析結果を紹介している。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
			（1991），pp.4～5	
39.住宅計画における団らんのバラエティと公室系空間の平面構成の関係に関する研究	単	1987年12月	日本建築学会　大会学術講演梗概集（近畿）1987年度、pp.5089～5090	住宅の公室系空間においては、食後にくつろぐという行為以外に、年中行事、通過儀礼、季節、好み、趣味等に関わり様々なスタイルの団らんが考えられ、それぞれ家族生活の安定に寄与しているといえる。これらの団らんが公室系空間の構成にどのように関わるのかを明らかにする為、実態調査の分析結果をもとに特に生活行為と空間の構成・室数に着目し考察を行なっている。
40.住宅計画における団らんのバラエティと公室系空間の平面構成の関係に関する研究	単	1987年12月	日本建築学会　大会学術講演梗概集（近畿）1987年度、pp.5089～5090	住宅の公室系空間においては、食後にくつろぐという行為以外に、年中行事、通過儀礼、季節、好み、趣味等に関わり様々なスタイルの団らんが考えられ、それぞれ家族生活の安定に寄与しているといえる。これらの団らんが公室系空間の構成にどのように関わるのかを明らかにする為、実態調査の分析結果をもとに特に生活行為と空間の構成・室数に着目し考察を行なっている。
41.居住構造の研究　--脇町の居住構造その１～その４	共	1985年10月	日本建築学会　大会学術講演梗概集（東海）1985年度、pp.811～812 重村、山崎、大森（黒田）、伴丈、久元、岩井	地域における居住構造を明らかにするため、徳島県脇町の実態調査をもとに、その居住特性と地域構成、集住パターンの地域特性、宅地・敷地利用の地域特性、脇町の居住動向と居住関係、居住動向から見た町営住宅の役割、地域定住サイクルと、住宅・環境ストックの活用課題等について考察を行なっている。　分担大森（黒田）
42.住宅計画における公的空間の意味・目的についての計画論的考察その１、その２	共	1984年10月	日本建築学会　大会学術講演梗概集（関東）1984年度	住宅計画においては、以前のnLDK理論では説明のできない事象問題が多く見られ、特に公室系空間における生活行為の多様さは、公室系空間をＬ、Ｄという概念で語ることを困難にしている。本研究では実態調査をもとに、社会・文化的生活行為に関わる潜在的住生活要求を、空間のどのような構成・性状がひきうけているかを考察している。（pp.1065?1068）
43.C.AlexanderのThe Timeless Way of Buildingにおける諸概念について	単	1983年6月	日本建築学会近畿支部　研究報告集1983年度、pp.657～660	C.Alexanderの著書The Timeless Way of Buildingより、彼の設計方法論における最上位概念であるThe Quality without a Nameとその実践手段としてのパタンランゲージの本質的特性の解明を試みている。
３．総説				
1.デザインの「遺伝子」をめぐる試論 ―『座るための機械』から『休息のための機械』へ	単	2023年12月1日	生活環境学研究, 巻 11, p. 11-16, 発行年 2023-12-01	20年以上の時を経てなお、ホフマンの『座るための機械』(1905)とコルビュジエの『休息のための機械』(1928)との間には、椅子としての形態や素材の違いにもかかわらず、アナロジーとしての「機械」、機能・目的としての「休息」、表現形態としての「幾何学」という3つの共通点が認められる。これらの共通点を、両者に受け継がれたデザインの「遺伝子」として仮説的な視点とし、比較対照した。まず、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の首都であった国際都市ウィーンにおけるホフマンの異文化尊重の姿勢について考察した。そして、ウィーンの新様式を目指すホフマンが、プルカースドルフのサナトリウムについて自ら記した意図がそこに装備する『座るための機械』の意図でもあることに着目した。特に、コルビュジエの『休息のための機械』との接点として、両者が共通して参照したモリス・チェアの機構と、やはり共通して実現の手段としたトーネット社の曲木（ホフマンの場合はトーネットの技術を援用するコーン社）および鋼管の技術との関係へと視点を広げ考察した。 以上のことから、1907年、20歳のコルビュジエがホフマンと直接対面した経験が、パリ、ベルリンでの修業や『東方への旅』(1911)へとコルビュジエを駆り立てたのではないかという結論を得た。また、パルテノン神殿でコルビュジエが直感した「機械」は、ホフマンの『座るための機械』における「機械」と同質で、後の「住宅は住むために機械」(1921,23)や、『休息のための機械』(1928)につながると推測される。
2.打出の小槌と共に―光と水の建築	単	2016年2月	意匠学会誌　デザイン理論６７号 p.124～125	平成27年度意匠学会シンポジウム「ライト式建築の諸相の内容を記述・報告
3.藤戸石―三方院庭園にて	単	2015年5月	芸術工学会 2015年5月 p.56	醍醐寺三方院の庭には、名物と言われる石が数多く配置されている。特に、名物として名高い藤戸石は、庭の空間構成の核とされ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
３．総説				
				る。藤戸石の来歴から、戦国武将が愛でた理由を考察し、それに基づいて、曼荼羅を参照したとされる庭の構成の意味について考察した。
4.建築的形態の生成ー始点としての椅子	単	2015年5月	芸術工学会誌 68号 2015年5月 p.57	自由学園明日館のテーブルと椅子は、遠藤新が1923年にデザインした。帝国ホテルの設計を終えたのとほぼ同時期である。椅子の座面のデザインが、同じく遠藤の「建築美術」（1926）の「第三のもの」の事例として用いた図と類似していることに着目し、椅子のデザインについて考察を行った。
5.至上をめざす建築の行者　遠藤新、白い国の詩、	単	2010年6月1日	東北電力株式会社、p.5~9	遠藤新(1889-1851)と師フランク・ロイド・ライト(1867-1959)との出会いは、真に偉大であろうとする遠藤自身の意志に導かれたものである。それを基盤に遠藤は、自然に即し人の生活を尊重する自らの建築理念を培い、名作・甲子園ホテル（1930）を実現した。彼の理念は、日本と異質の建築条件である大陸の仕事へと展開した。帰国後は、政権と経済の論理に屈せず、学校建築の多くを東北地方で実現した。
6.柳宗悦による軸装の清新と升目の書にみる他力の美	単	2010年1月10日	芸術工学会誌　50号刊行記念特別号	大阪日本民芸館開催の「茶と美ー柳宗悦茶を想う」に学生を引率。その際、特に印象に残った柳による掛軸について、「點茶心指」の意味、柳にとっての心偈、さらに原稿用紙に書を書く行為について考察した。
7.柳宗悦による軸装の清新と升目の書にみる他力の美	単	2010年1月10日	芸術工学会誌　50号刊行記念特別号	大阪日本民芸館開催の「茶と美ー柳宗悦茶を想う」に学生を引率。その際、特に印象に残った柳による掛軸について、「點茶心指」の意味、柳にとっての心偈、さらに原稿用紙に書を書く行為について考察した。
8.宗悦による軸装の清新と升目の書にみる他力の美		2010年1月10日	芸術工学会誌刊行50号記念　特別企画号、p.78	大阪日本民芸館開催の「茶と美ー柳宗悦茶を想う」に学生を引率。その際、特に印象に残った柳による掛軸について、「點茶心指」の意味、柳にとっての心偈、さらに原稿用紙に書を書く行為について考察した。
9.桜の香の蜜に魅かれて	単	2010年1月10日	芸術工学会誌刊行50号記念　特別企画号、p.64	西宮商工会議所を通じて取り組んだ産学連携において、事業者である養蜂家からのヒアリング、養蜂場の見学、提案したラベルデザイン実現の顛末などの体験をまとめた。
10.＜ＣＡＤ／ＣＧによるてデザイン教育システム＞計画の経緯と概要	単	1995年	情報教育研究センター年報 ’95通巻４号	＜ＣＡＤ／ＣＧによるてデザイン教育システム＞は、’93年度より生活環境学科及び生活造形学科のデザイン教育方法の検討と並行し教育設備の一環として立案され、’95年度文部省私学助成（教育装置）対象事業として採択・実現に至った。本稿では、システムの立案の経緯・背景と必要性を述べ、これをふまえて理念と概要について、教育目標、活用方法および既存教育装置との関係を示し、論じている。全（pp.51?58
11.祭事の場の構造化に関する研究	単	1991年11月	日本インテリア学会　第３回大会研究発表梗概集（1991），pp.4～5	祭事が内包する諸相を〈内容〉と〈形式〉という２つの視点から捉え、祭事が現出する場の特質を構造的に解明するために行った調査事例と分析結果を紹介している。
12.関西の祭事の研究ー序ー	共	1991年3月	建築と社会　72通巻828号、（1991）、pp.108～115 大森　智子、久村宗憲、田中康、藤木真、宮野道雄	関西での祭事を調査対象とした本研究では、祭事の形式的側面に着目し、空間を特徴づける諸要素の構成を〈空間・道具・演出〉という３方向から抽出している。
13.オフィス・プレジャー	共	1991年2月	建築と社会、　72通巻827号、（1991）、（pp.29-42）	大森　智子、石倉健彦、大橋真由美、加藤力、神谷剛、北浦かほる、駒田哲男、西川純一、福田由利、増池秀夫 ワーカーの感性を近年配慮する傾向にあるオフィス・インテリアを〈空間の機能〉・〈空間の装備〉・〈行動と心理〉という３側面から分析し今後の動向を探っている。
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
1.フィールドワーク	単	2014年7月		アメリカの以下の都市を調査・見学 １．セント・オーガスティン（フロリダ） ２．フランク・ロイド・ライトの一連の作品 ・オーク・パークの住宅、シカゴのオフィスビル、タリアセ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
				ン・イースト（アトリエと住宅）
2.フィールドワーク	共	2012年7月		ブラジルの以下の都市の調査・見学 1.ブラジリア 2.サンパウロ 3.クリティバ（パラナ州）
3.衣・食・住育の＜コト＞・＜モノ＞・＜空間＞	単	2010年10月	芸術工学会誌　刊行50号記念特別企画号、p.83	食博覧会・大阪（2009年4月29日～5月10日、インテックス大阪）において、武庫川女子大学のブース展示が大学として初めておこなわれることになった。ブースのサインおよび空間のデザイン、販売する弁当のパッケージデザインなどに、ゼミ生・有志の学生と取り組んだ。その内容について紹介。
4.フィールドワーク	単	2009年		アイルランドの以下の都市で調査・見学 1.　ダブリン（パトリック・ゲデスの関係資料収集） 2.　タラ
5.フィールドワーク	単	2007年、2008年		スコットランドの以下都市で調査・見学 1.　グラスゴーにて、パトリック・ゲデス関連資料およびチャールズ・レニー・マッキントッシュ関連資料を収集 2.　エジンバラにて、パトリック・ゲデス関連資料
6.フィールドワーク	単	2006年		インドにおいて以下の調査見学をおこなう。 1.　ブバネシュバールおよび近郊都市（オリッサ州）のヒンズー教寺院 2.　チャンディガール（パンジャブ州、ハヤリーナ州）のル・コルビュジエの建築作品 3.　デリーおよび近郊のマーケット（クラフト）
7.フィールドワーク	単	2004年7月		バルセロナにおいて以下を調査・見学 1.アントニオ・ガウディの建築作品 2.海岸の現代建築群 3.中世・近代の街並
8.フィールドワーク	共	2004年		E.ハワードが計画しR, アンウィンが設計した田園都市・レッチワースの調査・見学
9.フィールドワーク	共	2000年		ギリシャ・ローマ時代の植民地遺跡を、リビヤのサブラサ、アポロニア、ベンガジ、トリポリ、ラピスマグナにて調査
10.フィールドワーク	単	1997年		オスマン朝のイスラム寺院の内部空間の特質を、イスタンブール、ブルサ、エディルネにおいて現地調査
11.フィールドワーク	共	1995年05月		下賀茂神社・流鏑馬神事における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Yabusame-Shinji in Shimogamo Shrine
12.フィールドワーク	共	1994年09月		下賀茂神社・式年遷宮における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Shikinen-Sengu [ ] in Shimogamo Shrine
13.フィールドワーク	共	1994年09月		上賀茂神社・烏相模における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Karasu-Zumo [ ] in Kamigamo Shrine
14.フィールドワーク	共	1994年07月		下賀茂神社・御手洗祭における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Mitarashi-Festival in Shimogamo Shrine.
15.フィールドワーク	共	1994年06月		上賀茂神社・夏越祓における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Nagoshi-no-Harae in Kamigamo Shrine
16.フィールドワーク	共	1993年8月		火を主題とする祭事における場の変容に関するの調査: 花背の松上げ及び久多のちゃちゃんこ踊り（花笠踊り）　A Field work of Saiji with a Thematic Fire　“Matsunage”of Hanase and “Chachanko”of Kuta
17.フィールドワーク	共	1993年08月		下賀茂神社・矢取の神事における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Yatori-no-Shinji in Shimogamo Shrine
18.フィールドワーク	共	1992年10月		鞍馬の火祭における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Fire Festiral in Kurama
19.フィールドワーク	共	1992年08月		花背の松上げ行事における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Matsuage in Hanase
20.フィールドワーク	共	1992年05月		下賀茂神社・切芝の神事における場の変容についてのフィールドワーク　A Fieldwork of Kirishiba-no-Shinji in Shimogamo Shrine
21.フィールドワーク	共	1992年		下賀茂神社・葵祭における場の変容についてのフィールドワーク（境内内）　A Fieldwork of Aoi-Festiral in Shimogamo Shrine（1992年・1993年５月）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
22.フィールドワーク	共	1992年		上賀茂神社・葵祭における場の変容についてのフィールドワーク（境内内）　A Fieldwork of Aoi-Festiral in Kamigamo Shrine（1992年・1993年５月）
23.「世・界・祀」	単	1990年11月	「游女の都市」建築展出展　大阪展　東京展　掲載：《Design & Architccture icon　1991-１》	立体　オブジェ　Ａ＿２　　パネル１枚
24.BLUE & YELLOW CHAIR	単	1988年02月	イスヤ商会家具デザインコンペティション	Ａ１サイズ１枚
25.LANDSCAPED WITH THE WIND	共	1987年12月	第７回ホクストン建築装飾デザインコンクール	Ａ１サイズ１枚
26.KIRICCO-AGEHA & RABBIT	単	1987年01月	Ｐ／Ａ７th Annual International Furniture Competition	（508×762）１枚
27.AGEHA & RABBIT	単	1986年12月	SAPORITI ITALIA DESIGN COMPETITION	Ａ３サイズ２枚
28.KIRICCO	単	1986年11月	ひろしま家具コンペティション	Ｂ１サイズ１枚
29.SACRED-COMMON（ベスト50）	単	1986年01月	Ｐ／Ａ６th Annual International Furniture Competition	（508×762）１枚
30.WEAVING THE NEW BANLLEUE INTO LIFE	共	1984年05月	日仏新建築設計競技（ＰＡＮ13Ｊ）　Plan Construct et Habit主催 Program Architccture Nouvell Combetition　掲載：《都市住宅1985.６》	Ａ０サイズ１枚　Ａ１サイズ４枚
31.駒ヶ根市文化公園施設案	共	1984年03月	駒ヶ根市文化公園施設群公開設計競技　掲載：《設計競技応募作品集》《新建築1984.７》《建築文化1984.７》	Ａ１サイズ４枚
32.地場産業振興のための拠点施設（３等）	共	1982年11月	日本建築学会主催設計競技　掲載：《建築雑誌1982.２》《新建築1982.２》《建築文化1982.２》	Ａ１サイズ４枚
33.ANBI SOFA	単	1982年04月	第１回アルフレックス国際デザインコンペ（ベスト50）	Ａ１サイズ１枚
34.肢体不自由児のための養護学校（入選）	共	1981年11月	日本建築学会主催設計競技　掲載：	Ａ１サイズ４枚

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
35.共に成長する家具	単	1981年09月	《建築雑誌1982.４》「大日本印刷主催木製家具コンペティション」　掲載：《室内1981.９》（2等）	Ｂ３サイズ３枚
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.クロスアポイントメント制度による活動報告 ―大阪公立大学建築学科倉方研究室との合同ゼミと研究交流の経過―	単	2023年2月	生活環境学研究 No.10 pp.○－○（予定）	大阪市立大学（現・大阪公立大学）大学院工学研究科および工学部と武庫川女子大学大学院及び全学部との間において、2019年、教育・研究に関する協定が結ばれた。それを契機に市立大学から本学にクロスアポイントメントの要請があり、2020年度から、工学部建築学科倉方俊輔教授と武庫川女子大学生活環境学科黒田智子（筆者）との研究室間で、卒業研究のための合同ゼミが開始し、今年度で3年目を迎える　。2020年度はコロナ禍の一年目でもあり、合同ゼミは遠隔で毎月1回、各研究室の所属学生が交代で成果を発表してきた。2年目の2021年9月、倉方先生が教授に昇進され、建築学科の歴史・意匠講座に変化があった。その11月、本学生活美学研究所において筆者が主宰する甲子プロジェクト研究会で、伊東忠太についてのご講演をお願いし、研究交流も始まった。伊東忠太は、甲子園ホテル（現・甲子園会館）の設計者遠藤新の東京帝国大学時代の恩師である。3年目の今年度（2022年度）、研究所の嘱託研究員をお願いし、伊東から遠藤への影響について共同研究を開始する。特に今年度は、大阪市立大学が、大阪府立大学と合併し大阪公立大学となった年でもある。このような変化の中で、2年間の教育・研究の交流について振り返える。
2.近代と交差する土地の記憶		2022年12月20日	令和4年度地域連携協議会研究発表会	近代と交差する土地の記憶」：生活美学研究所甲子プロジェクト研究会での建築論研究を基盤とした2016年以来の試み、それと並行し考察し、2019年以来研究室で始めた研究の経過を紹介。特に、阪神電鉄による旧枝川廃川地の開発と、それに伴う旧鳴尾村の変化について、特に水環境による地域景観についての歴史的・空間的視点（見える要因（表流水・緑・高低差・石碑など）と見えない要因（地下水・水源）という視点）からの調査について発表。コロナ禍で2020年以来停止していたフィールドワークの今年度の再開および活動内容（甲子園筋のMAPづくり）について発表した。特に、水源の視点からは、宮水発祥の井戸及び宮水の水域と西宮神社（えびす神）の関係が、旧鳴尾村の灌漑用水・甲子園開発地の上水の水源および水源域と甲子園ホテル（大黒天）の関係と相同していることを指摘した。
3.遠藤新卒業論文”Description on City Hotel Design”(1914)の翻訳	単	2020年11月		原典は東京大学工学部図書館所蔵 これまで公にされていなかった遠藤新の卒業論文は、手書きの英文（一部独文）である。それを順次活字にし和訳した。（2017ー2020）
4.津波啓発サインの提案	共	2013年1月13日	道具学会研究発表フォーラム	2012年度に官学連携で取り組んだ、西宮市津波啓発サイン計画について報告している。津波啓発サインとは、南海トラフ地震にともなう津波にたいして、市民の防災意識を喚起し育成する(啓発）ことを目的とする。先例がないため、研究室と学生とが工夫したワークショップ取り組みとその成果を考察している。
5.グループ討論　時間のヒューマンスケール「もの」・「こと」・「とき」の関わりの中で	共	2007年10月	芸術工学会　春季大会（東京）記録号　第44巻、p.24-28	（鈴木成文、大井尚行、他）大テーマ：「芸術工学再考 デザイン領域の拡大と芸術工学(デザイン学)の果たす役割)」に対しての討論会。アールブリュットの表現とモダニズムにおける建築表現との本質的な違いとは、という問いは、モダニズムの社会性に光を当てるのではないか、建築家に依らない建築や界隈に素晴らしい空間があるのはなぜか、などを討議。
6.スタディ・プレゼンテーションの両方に適した教育用の建築系ソフトを一年間に	単	1995年		Form ZおよびMini Cadを、設計・製図用ソフトとして選択

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
わたり検討・選択				
7.古代から近代までのヨーロッパの人体モデル及び中国の風水説における人体の捉え方を整理・考察	単	1995年		実体験ラボを活用したヒューマンスケールからの発想を重視したデザイン教育のため
8.パネルディスカッション　からだとくらしの環境学　たべる・よそおう・つたえる	単	1994年	学院創立55周年記念　明日をひらく武庫川女子大学シンポジウム特集	
9.テーマセッション「祭り」	共	1992年	ファッション環境学会　第１回大会シンポジウム　掲載：《ファッション環境Vol．２-２》	
10.シンポジウム　“なぜ「游女の都市」か”	共	1992年	「游女の都市」建築展　シンポジウム，日本建築協会主催	
６．研究費の取得状況				
1.モダニズムと交差する土地の記憶	単	2022年6月	南阪神県民センタ　令和4年度 令和４年度大学生による地域活性化支援事業	[現状と課題] 甲子園筋には、旧甲子園ホテル、松山大学温山記念館など歴史・文化遺産として地域のシンボル的な存在がある一方、周辺地域住民にはあまり認知されていない。また、甲子園筋は、近代の大規模線状開発地・甲子園の中央を走り、広い歩道・自転車道を持つが、その歴史的意味や役割もあまり認知されていない。さらに、かつては水系が自然景観を形成していたが、現在は、かなり失われている。 [事業目的・趣旨] 地域住民・学生の甲子園筋界隈への興味・関心を呼び起こすために、旧甲子園ホテルの反対側に位置し全国に知られる甲子園球場、地域住民に親しまれる洋菓子の老舗ベルン、さらに地域住民の憩いの場となり甲子園開発地以前の歴史を刻む鳴尾義民碑の歴史・旧水路・松林の痕跡など、甲子園筋を特徴づけるスポットを、甲子園筋の成り立ちと共に調査し、地域住民にフィードバックする。 [事業の概要] 武庫川女子大学生活環境学科の学生たちと、甲子園筋のヒアリングおよびフィールド調査をおこない、その成果をまとめ「まち歩きマップ」を作成する。
2.遠藤新卒業論文”Description on City Hotel Design”(1914)の翻訳	単	2020年11月	原典は東京大学工学部図書館所蔵	これまで公にされていなかった遠藤新の卒業論文は、手書きの英文（一部独文）である。それを順次活字にし和訳した。（2017ー2020）
3.空間デザイン論研究室の甲子プロジェクト	単	2019年6月	公益社団法人　兵庫県建築士会	甲子園開発地の景観調査を行い、甲子園ホテルの立地や建築との関連性を考察する。結果を、現在のまちの魅力として地域に認識され、まちづくりのイベント等に活用されるようにまとめる。 甲子園開発地（旧枝川沿いの開発地）は1924年に甲子園球場を完成した阪神電鉄が、「なんでも日本一」の理想を掲げて1930年「西の迎賓館」甲子園ホテルを開業すると共に整備した住宅地。今回、同地における自然及び歴史的景観要素とその魅力を、歩行者の視点から調査し、まちの魅力を発見したい。
4.甲子園ホテル・帝国ホテルの比較研究	共	2019年4月	日本インテリア学会期限付き研究部会	甲子園ホテル（1930）の外観を特徴づける2本の塔は、設計者である遠藤新（1889-1951）によれば、水平性に対する垂直性の「破調」によって、建築に、環境との「完全なる調和」を与えるという。現在、これらの塔は、密教の護摩法要に用いる仏具の意味と形式を与えられているのではないか、という結論に至っている。そこで、ランドマークとして、塔の形態構成、仕上げ、装飾について、その特徴を実測・観察によって分析する。また、塔は、煙突として、暖炉

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
				とそれを包括するインテリア、さらに厨房とボイラーに連続している。同様に、全体の機能配置と煙突の関係、暖炉の形状、インテリアの内装、装飾などについて、その特徴を実測・考察によって分析する。これらの活動を学生と共に行い、その結果を、護摩法要の儀式・仏具と照合する。現在、遠藤が重要な意味を持たせたと考えられる装飾が塔から失われており、歴史文化遺産の観点からも、実証したい。
5.甲子（きのえね）プロジェクト―シンボル・マーク・打出の小槌の意味と背景	単	2016年4月～	武庫川女子大学生活美学研究所甲子プロジェクト特別経費	甲子園ホテルのシンボルマークは、通常のように食器・パンフレットなどに使われるだけでなく、様々なバリエーションで建築に取り付けられている。他に類をみない建築装飾の意味と背景を、地域の社寺にまつわる信仰・エピソード・1930年前後の歴史的出来事・新聞記事などにみる市民の生活に探る。
6.甲子園ホテルにおける遠藤新の設計理念と方法	単	2015年4月～2016年3月	平成27年度科研費学内奨励金	遠藤新の造形における理念・方法を読み取るための資料作成。甲子園会館の西ホールとロビーを実測し、CAD化する。
7.日本の農業6次化が都市家庭の食生活に及ぼす影響に関する研究	単	2015年4月～2016年3月	株式会社JFC	2013年と同様の趣旨で、北海道と鹿児島の農地を調査し、資料を収集
8.豊中市における「ふるさと納税」に係る返礼品の設定	単	2015年2月～2016年6月	豊中市	豊中市が、2016年度から開始するふるさと納税の返礼品について、企画・提案する。授産施設で制作すること、豊中らしさを表現すること、今後商品として販売できる可能性があるものなどの条件に対するものである。
9.日本の農業6次化が都市家庭の食生活に及ぼす影響に関する研究	単	2013年9月～2014年3月	株式会社JFC	カット野菜の生産過程を消費者に分かりやすく紹介する。そのための、現地調査および資料の収集
10.エコグリーン北海道の「ごぼう」と「ながいも」のカートンデザインの提案	単	2011年4月	株式会社神戸物産	2011年度、北海道の農地から始めて収穫するジャガイモ、ナガイモ、ゴボウのカートンをデザインする。国産品・豊かな自然・安全安心などを表現する。
11.基盤研究（Ｃ）　継続	単	2009年	日本学術振興会科学研究費	パトリック・ゲデスの都市論における女性の生活像
12.基盤研究（C）　継続	単	2008年	日本学術振興会科学研究費	パトリック・ゲデスの都市論における女性の生活像
13.基盤研究（Ｃ）　新規	単	2007年	日本学術振興会科学研究費	パトリック・ゲデスの都市論における女性の生活像

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2024年4月1日2025年3月31日	日本建築学会近畿支部建築論部会幹事
2.2024年2月23日武庫川女子大学 生活環境学科 H2-321	2023年度 道具学研究発表フォーラム基調講演
3.2024年2月15日	令和5年度地域連携協議会研究発表
4.2023年11月30日	兵庫県自治賞受賞
5.2023年4月1日2024年3月31日	日本建築学会近畿支部建築論部会副主査
6.2023年4月1日2024年3月31日	日本建築学会近畿支部建築論部会副主査
7.2022年12月20日	令和4年度地域連携協議会研究発表
8.2022年11月12日	JID（公益社団法人日本インテリアデザイナー協会）主催の第12回デザインコンファランス・テーマ「輝く未来につながるデザイン新常態」のパネラー
9.2022年9月5日	日本建築学会大会研究発表会歴史・意匠部門司会
10.2022年9月5日	日本建築学会大会研究発表会歴史・意匠部門若手研究者発表についての採点
11.2022年6月25日	日本建築学会近畿支部研究発表会歴史・意匠部門若手研究者発表についての採点
12.2022年6月25日	日本建築学会近畿支部研究発表会歴史・意匠部門研究発表司会
13.2022年6月2022年2月	「令和4年度学生による地域活性化補助金事業」による兵庫県阪神南県民センターからの補助金交付
14.2022年4月1日2023年3月31日	建築学会近畿支部建築論部会主査
15.2021年4月1日2022年3月31日	日本インテリア学会第33回大会実行委員長
16.2020年10月	日本インテリア学会論文審査
17.2019年4月1日	日本建築学会近畿支部建築論部会役員（主査・幹事等）

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
６．研究費の取得状況	
18.2019年4月	建築論研究会委員
19.2018年4月14日	日本インテリア学会感謝状
20.2017年11月2018年2月	日本生活学会投稿論文の審査
21.2017年10月2018年2月	日本インテリア学会投稿論文の審査
22.2014年4月1日～	日本建築学会協力委員
23.2013年3月2日	BS朝日番組「甲子園ホテルの想い出ー二人の天才の物語・遠藤新とF.L.ライト」出演
24.2012年4月1日～	日本建築学会近畿支部建築論部会コアメーンバー
25.2012年4月～2013年12月	第4次西宮市総合計画・中間見直しに係る学識経験者懇談会
26.2008年7月1日～2012年6月30日	西宮市都市計画審議会委員